東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

学内広報

for communication across the UT

ホームカミングデイには家族連れもたくさん訪れた

特集：■第10回東京大学ホームカミングデイ開催!
■平成23年度第1回学生表彰
「東京大学総長賞」授与式開催
■東京大学基金 大気海洋研究所国際沿岸
海洋研究センター活動支援プロジェクト始まる

2011.11.24

No.1418

第 10 回東京大学
ホームカミングデイ開催！

10 月 29 日（土）、秋晴れのもと、第 10 回目のホームカミングデイが開催されました。今年は約 5500 人の方が来場しました。安田講堂で開催された特別フォーラムは「世界で学ぶ、働く、生きる」をテーマとし、浜田宏一イェール大学経済学部教授が「大学の国際化はなぜ必要か」「学際教育の重要性」等についてのキーノートスピーチを、引き続き、江川雅子理事をモデレーターとして、国内外で活躍する 4 人の卒業生がパネルトークを実施しました。異なる年代の、海外で活躍する多様な卒業生たちが、国際舞台における日本人の競争力、国際社会の実情と今後の日本の役割について語りました。

また、従来のホームカミングデイは比較的シニア層の参加が多いイベントでしたが、今年は若手卒業生の有志たちが、幅広い世代の卒業生にキャンパスに戻ってきてもらおうと「UTFestival」を企画しました。小宮山宏前総長や本田由紀教授（教育学研究科）の講義をはじめ、東大出身のソノダバンド、卒業生たちが登場する座談会など、ホームカミングデイならではの多彩なプログラムが催されました。家族で楽しめるキッズ企画もあり、20 代～ 40 代の親子連れの姿も目立ちました。さらに NPO 法人「街 ing 本郷 (文京区)」と連携し、銀杏並木には地元商店街や関連の飲食店が出店しました。世代を超えた多くの卒業生とその家族が参加し、キャンパスはいつにもまして賑わいをみせた 1 日でした。

総長挨拶

本日はようこそ東京大学ホームカミングデイにお越しくださいました。まさにイベント日和の日に皆さまをお迎えでき、嬉しく思っています。

東京大学では、東日本大震災において、岩手県大槌町の国際沿岸海洋研究センターがほぼ水没し、復旧に取り組んでおります。さらに東京大学の学生・教職員がそれぞれの専門分野を生かしながら 80 有余を超えるプロジェクトを立ち上げ、被災地復興のために医療や街づくり、産業再生、防災、放射線防御などの活動をしています。

また大学はタフな東大生の育成への取り組みをすすめています。そのひとつが秋入学の検討です。国際化の流れのなかでのんびりとはしていられない―大胆に動くことから次のステップが生まれてくるという思いで提案をしています。卒業生の皆さまと大学との関係を強化するために、大学改革の活動については折々ご報告したいと考えていますので宜しくお願いいたします。本日は、多彩なイベントをお楽しみください。

◆モデレーター　◆パネリスト

江川雅子

東京大学理事（卒業生室長）

赤地 葉子氏（2001 年薬卒）

世界エイズ・結核・マラリア対策基金 テクニカルオフィサー

2007 年ハーバード大学大学院博士課程修了。ベトナムで子供の栄養改善に携わった経験を機に国際保健を志す。UNICEF、WHO を経て、2009 年より現職。

土井 香苗氏（1998 年法卒）

弁護士 / ヒューマン・ライツ・ウォッチ日本代表

弁護士の傍ら、難民の法的支援や難民認定法の改正にかかわる。 2006 年ニューヨーク大学ロースクール修士課程修了。ヒューマン・ライツ・ウォッチ本部フェロー、日本駐在員を経て 2008 年 9 月より現職。

野口 聡一氏（1991 年大学院工学系研究科修士課程修了）

JAXA 宇宙飛行士

1991 年 IHI を経て JAXA 宇宙飛行士選抜。2009 年 12 月～ 2010 年 6 月日本人初のソユーズ宇宙船フライトエンジニアとして搭乗。宇宙滞在期間は日本人最長記録。（2011 年 10 月 29 日現在）

水越 豊氏（1979 年経卒）

ボストンコンサルティンググループ日本代表

1980 年新日本製鉄を経てスタンフォード大学 MBA 取得。1990 年ボストン コンサルティング グループ入社、2005 年日本代表就任。通信、金融、情報システムなど幅広い業界で変革プロジェクトを手掛ける。

特別フォーラム 世界で学ぶ、働く、生きる

キーノートスピーカー　浜田宏一氏

1958年法卒、1960年経卒
イェール大学経済学部教授

東京大学経済学部教授を経て1986年より現職。IMF・ESAF（拡大構造調整ファシリティー）評価官、WTO総長諮問委員などを歴任。

アイディアが進歩するには類推が重要である。ある事柄を純粋に考えてもう一歩進めるには、他の事柄から考えて、こちらにも使えないか、と考える事が必要だ。私自身法学部を出たが、法律を勉強するのが辛かった。記憶力や理解力に優れた同級生が多く、法律学者にはなれない、と考えて経済学部に移ったが、実はこの経験が人生で大きなプラスとなっている。「経済学ではこうだが政治学ではどうなのだろう」という考え方、視点は大変役立っている。学問が進歩するには異質なものが必要であり、その意味で学際、境界領域の研究は重要だと思う。

「どうして国際化が必要か」という問いであるが、そもそも西洋・東洋では考え方、解釈が違っている。“水に沈む石と浮かぶ木の葉”にたとえて言えば、日本では石が水に沈み浮かぶのは落ち葉であるという考え方であり、西洋では頑張って浮かび上がったものが木の葉、沈んだものは仕方がないという解釈である。内容と表現は相関関係にあり、それを理解するためにも異なった文化・考え方に触れることが必要なのである。

外国の学問、生き方を学ぶ事は他の領域を学ぶ以上に有効。これこそ国際化のメリット

私は海外で優れた教授陣に恵まれ、学者人生として、日本的な発想とは全く違う観点から教えを受けてきた。研究テーマについて「きちんと調べてきます」と話すと「研究を始めるときは先駆者の仕事を調べすぎてはならない。発信者は自分で考えなさい」と指導され、目からうろこであった。

さらに日本の国際化を妨げているものは何であるか考えるに、日本のマクロ経済学は今でも世界から孤立した日本独自の学説にこり固まっている。日本の経済学界が国際化すれば、日本経済も回復するのではないかと思う。大学の国際化もまた同様であり、イェール大で経済学ゼミ専攻の中国人留学生に尋ねたところ、「国によって入学時期が異なるのは障害である」と意外な答えがあった。入学時期の問題は国際化のための関心テーマだとあらためて認識した次第である。

赤地葉子氏　自分がやりたい事、好きなことを極めて

国際機関で働いていると、日本は国連への拠出金が世界第2位であり、私の勤めている機関でも188億ドルの予算のうち14億ドルを拠出している。もう少し国として世界に向けて自信をもってアピールしてみてもいいのではないか、と少し残念に思う。

国際化が進んでいる今こそ、好きなことを見つければとことん追求する道につながる。従来はこの国の中で自分に何ができるか、何が最良かという選択だったが、その枠がなくなっている。私自身はやりたいことをグローバルな立場から見てみたいということで職場を選択し、現在の仕事にしている強みを感じている。少しでも「海外に出てみたい、ちょっと変わったことをしてみたい」と思った人はぜひトライしてみて欲しい。東京大学を出たということは社会に出てからの強みになるだけでなく、まったく未知の世界に踏み込んでもやっていける力を養ったことなのだという自信をもって。

野口聡一氏　能力はクリエイティビティ、プロブレム・ソルビング、この2つ

日本人は予定調和が好きでコンフリクトを極力避ける傾向にある。相手を尊重しながら仕事をするのは日本人の美徳だが、コミュニケーション能力、競争力を出すうえでは弱点となる。日本は前例をしっかり分析して問題を解くことで高度経済成長を支えてきたが、それでは成り立たなくなっている。クリエイティビティで解決すべき問題を前例で解こうとしているから解けないのではないか。僕たちの時代の技術面でのヒーローは本田宗一郎さんで、敗戦の焦土から立ち上がり、改良に改良を重ねるところにオリジナリティがあった。おそらく今の20代の理系の学生のヒーローはスティーブ・ジョブズ。まさにクリエイティビティだけで人間と情報の在り方を変えた人であり、ロールモデルが大幅に変わる時代こそ、クリエイティビティを出して強みを出さなくてはならないと思う。

土井香苗氏　世界中の人が日本のような素晴らしい国に住めるよう、リーダーシップを発揮して

グローバルな舞台で日本人が生き残っていくためには、世界に向けて情報を発信していかなければならない。世界の大問題である紛争や独裁の解決に、お金を拠出するだけで問題は終わらない。国際政治の世界において、日本は経済と同様に紛争や独裁等の解決に取り組むことが求められているのではないか。しかしその姿が見えていない。お金を拠出しているので国際ルールとしてある程度リスペクトを持って扱われるが、その時点で終わっている事は残念であり、問題は次のポテンシャルだと思う。紛争、独裁、人権問題等大問題のためにどういう解決策を打ち出していくのか、戦略性をもって発信していけば日本は強いはずである。リーダーシップを発揮して世界をよりよくするために積極的に動くことが求められている今、世界が50年後どうなるか、アジアがどうなるかを社会的・政治的観点から見た時、日本が果たすべき役割は非常に大きい。

水越豊氏　物事を構造化して整理して伝える事が重要。構造化したロジックの上で話をせよ

コミュニケーションのテーマで必ず出るキーワードが「国際化」。すぐ英語の話になるが、日本人は勉強しかせず実際に使っている人が少ない。英語に限らずリーダーシップもクリエイティビティも同じ。これらはいくら勉強しても身につかないものである。

同様にコミュニケーションも同じことが言える。欧米人は携帯電話ひとつとってもOSがどれで、アプリケーションがどれでという構造化をしっかりと考えて作る。日本人はOSを有数無形に作り、OSもアプリケーションも一緒にしていいものを作る。

少なくとも国際舞台でコミュニケーションをとる時は、構造化したロジックの上で話をしないと通じない。コミュニケーションがとれるか否かは英語能力の問題ではない。また英語は上手くなくても自分の意見を持ち、伝えるべきメッセージをきちんと持っていることが大切である。

学部・研究科

3 工学部

株式会社寺田国際事務所 / 先端医療技術研究所代表取締役社長　寺田弘司氏による講演「先端医療のトピックス PET と癌とアルツハイマー病＆重粒子線治療、硼素中性子捕捉療法など」および、十倉好紀教授による講演「強相関量子科学ーエネルギーイノベーション″4″を目指してー」が行われた。

会場の様子

寺田弘司氏

十倉好紀教授

J 地震研究所

平田直教授による講演「東北地方太平洋沖の超巨大地震とその日本列島への影響」が行われた。

講演会の様子

6 農学部

岩田洋佳准教授による講演「ゲノミックセレクションで植物育種を加速する」、長澤寛道研究科長による講演「真珠の輝きはどのようにして作られるか」が開催された。

岩田洋佳准教授

長澤寛道研究科長

7 経済学部

三輪芳朗教授による講演「『銀行離れ』と『金融危機』(騒動)の実相」が行われた。

三輪教授

懇親会の様子

K 生産技術研究所

「震災から６ヶ月を経て」というテーマで、高川真一特任教授、須田義大教授、目黒公郎教授、黒﨑明特任教授による４講演が行われた。展示実演では「小児病棟において安全に遊べるロボット」が公開された。

講演をする須田教授

安全に遊べるロボット

4 文学部

「文学の明日を考える」をテーマに、菅野昭正名誉教授による講演、そして現役教員をパネリストに加えたシンポジウム「現代文学における『私』をめぐって」が開催された。約 200 名という多数のご参加をいただいた。

10 情報学環

目黒公郎教授による講演「災害レジリエンスの高い社会の実現を目指して」および、山本博文教授による講演「江戸時代の大震災と日本人」が福武ホールにて開催された。

目黒公郎教授

講演会の様子

9 薬学部

清水敏之教授（蛋白構造生物学教室）による講演「タンパク質の姿を捉える：蛋白質 X 線結晶解析の進歩と応用」、松尾壽之氏 (独) 国立循環器病研究センター研究所名誉所長による講演「Innovation　―私の経験から」が行われ、同日は薬友会総会（薬学部同窓会）も開催された。

松尾壽之氏

法学部

飯田敬輔教授による講演「変貌する国際経済秩序ー自由貿易体制・ドル基軸通貨体制の来し方・行く末」が行われた。

社会科学研究所

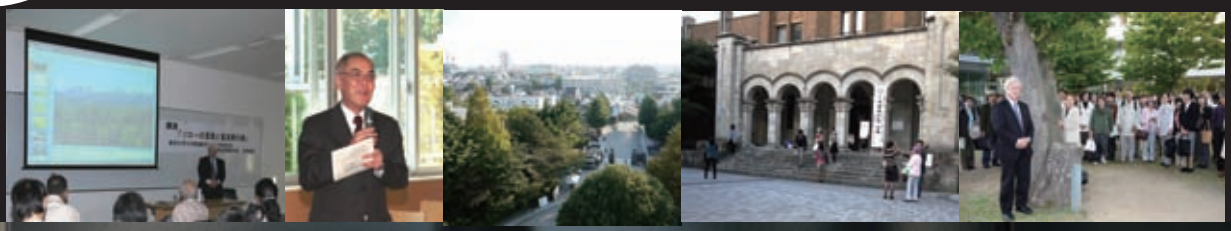
廣渡清吾名誉教授による「東日本大震災・原発事故と社会のための学術」の講演会が開催された。

講演する廣渡清吾専修大学法学部教授（前日本学術会議会長、本学名誉教授）

教育学部

川本隆史教授による講演「編み直し・脱集計化・脱中心化ー『白熱教室』JAPANで目指したもの」が行われた。

懇親会の様子



左から：①駒場の樹木を楽しむ会で講演される芝野北海道演習林長②オープニングセレモニーで挨拶する長谷川教養学部長③施設見学の一号館時計台からの展望④施設見学の一号館時計台公開の入口風景⑤駒場の樹木を楽しむ会でキャンパス内の樹木を説明する芝野北海道演習林長

駒場キャンパス

駒場キャンパスのホームカミングデイは、今年もコミュニケーション・プラザでのオープンニングセレモニーで幕を開けた。長谷川壽一教養学部長の挨拶に続いて行われた第10回教養学部選抜学生コンサートでは、スタインウェイフルコンサートピアノを奏でるピアノ独奏曲など８曲が演奏され、美しい曲の調べに会場の聴衆が魅了された。

恒例となった「駒場の樹木を楽しむ会」では、芝野博文北海道演習林長の講演会「ソローの言葉と富良野の森」の後、芝野先生の引率によりさわやかな秋空のもとキャンパス内を散策しながら樹木へのネームプレートの取り付けが行われた。

また、先日竣工した21KOMCEEの公開、そして、普段は入ることのできない１号館の時計台も特別公開され、見学者の列は終始途切れることがなかった。

昨年の紫綬褒章受章者で数理科学研究科の儀我美一教授の講演会「大きく変わる数学の役割」では、多くの聴衆がメモをとるなど熱心に聴き入っていた。

駒場博物館では特別展「一高 / 獨逸 - 第一高等学校資料に見る日独交流史 -」「はだしの写真展 - 東大駒場地区保育所の子どもたち -」、駒場図書館では企画展「一高 - 獨逸：駒場図書館篇」が終日催された。

教職員のOB・OG会であるベテラン会と合同開催されたレセプションでは、駒場の過去・現在・未来について語り合った。

当日はこの他にも各学科の同窓会が開催され、各イベントの参加者数は950名（延べ人数）を超えるなど、盛況のうちに一日を終えた。

【21KOMCEEの写真】左から：①ホールの様子②ホールの天井から美しく影を落とす光湧（こうゆう）③中庭の様子④外観

ホームカミングデイの一日

澄みきった青空のもと、久しぶりに母校を訪れ、旧友との再会を懐かしんだ卒業生たち。変わらないキャンパスのたたずまいを眺め、それでも少しずつ変化を遂げる現在のキャンパスの様子を知って満足された方も少なくないだろう。誰もがタイムスリップし、学生気分に戻った一日をご紹介。

卒業 30 周年学年会

卒業後四半世紀を過ぎて集まった同窓生は約 140 名。セピア色になりつつある思い出もこの日ばかりは色鮮やかに蘇った様子。意外に仕事の上でつながっていることを知って驚く人もいたようだ。／対象者：1977（昭和 52）年入学、1981（昭和 56）年卒業、1983（昭和 58）年医学部医学科卒業の方

茶道部お茶会

茶道部がお点前を披露。ホームカミングデイに懐徳館が一般公開されることを知って楽しみにしているファンも多い。

東大落語研究会寄席

トダイトーダイ。東大落語会主催の人気企画。10 名以上の OB が参加。最近テレビ等でも活躍している若手の噺家、春風亭昇吉（二ツ目）は経済学部出身。東大落語会寄席初顔見せ、今後はご贔屓のほどお願いたてまつります。

懐徳館

論語の「君子懐徳（くんしはとくをおもう）」に由来。枯山水の庭園と趣のある和館で、現在は迎賓施設として使われ通常一般公開はしていない。取り囲む木々本学が保有する全国の演習林から集められたものとか。

「今何しているんだ？」「元気だったか？」の自己紹介から始まる風景はどこも同じ。

予定時刻を大幅に超えた本田由紀先生の熱中講義。講義を受講したことがない卒業生が多数参加。

「教育・家庭・仕事～戦後日本型モデルの変容」世代に関係なく必聴の講義。講義終了後も積極的に質問があがり、参加者は大満足の様子。

本郷いちょう藝術祭

ホームカミングデイのオープニングプログラム。今年舞台を飾ったのは音楽部管弦楽団、柏葉会合唱団、音楽部コールアカデミー、コーロ・レティツィアの 4 団体。現役学生の皆さん、ご協力ありがとうございました。

小宮山宏前総長の特別授業。約 700 人が教室を埋めた。

子連れママたちも和やかな雰囲気の中、イベントに参加。

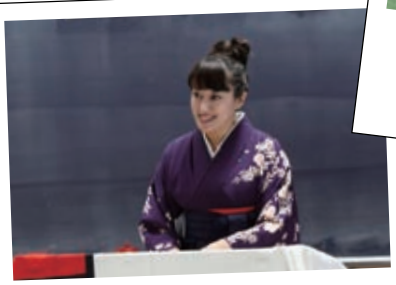
“親子でホームカミングデイを楽しむ”企画の「東大のびのび広場」。

東大 LB 会 (ア式蹴球部 OB 会) 主催の少年少女サッカー教室。未来の東大生 !?

藤枝シニア FC や東大スポーツ愛好会との親善試合。スーパープレーも続出か？

大クラス会

中央食堂を会場に大小のグループ、7 組 75 名が参加。飲食店と違って大学の食堂ならでは雰囲気に親子でリラックス。「大食堂」の広々としたスペースゆえ、周囲に気兼ねする必要もなく、一緒に楽しむ子どもたち。



春野恵子氏口演

東大卒浪曲師・春野恵子さんが特別出演。浪曲と出会い、芸能の魅力にひかれて弟子入りしたとか。現在では主に関西で活躍中。

同級生対談

5 人は 1998 年卒でつながる同級生。キャリアを中心に今に至るまでの貴重かつフランクな話ぶりに参加者も興味津々。

銀杏並木にお目見えした屋台の数々。地元商店街の協力を得て焼き鳥、焼きそば、弁当、和菓子など豊富な味が楽しめた。青空のもと、銀杏並木で気軽にビールが飲めるのも、ホームカミングデイならでは。

NHK アナウンサー小野文恵さん講演会はさつき会 (東大女性同窓会) 主催。参加者は男性が多かったようだ。

東大のびのび広場

乳児から小学生までのこどもたちとその家族 30 組以上が参加した。

ホームカミングデイは卒業生やその家族が久しぶりにキャンパスを訪れる絶好の機会。家族で過ごすのどかな休日の 1 シーン。

キャンパスツアー。学生ガイドの丁寧な説明は、意外に知らない話ばかりで関心することが多い。

受付開始から申し込み者で賑わう受付。

インターナショナルアラムナイフォーラム。外国人同窓生・教職員たちが集う。今年は濱田総長を迎え和やかに歓談する風景が見られた。国際化の基盤となるキーパーソンたちと。

東大ワールドカフェスペシャル

卒業生室の人気プログラムの特別版。当日は特別フォーラムのパネリスト土井香苗・水越豊両氏も参加。「世界で学ぶ、働く、生きる」をテーマに世代・業種を超えた 120 名の参加者が議論を展開。

インターナショナルアラムナイフォーラムは山上会館のレストラン「御殿」にて開催された。参加者は約 80 名。

多国籍かつアカデミックな顔ぶれ。

東大出身、人気のソノダバンド

音楽業界に新風を吹き込んだ異色のインストバンド。斬新にして心地よいサウンドで人気急上昇中。約 150 名の聴衆を前に 40 分のライブは大盛り上がり。

いつもは学生・教職員が行き交う銀杏並木もこの日ばかりは広場に様変わり。

観客も思わず体を動かすダンスパフォーマンス。

ご協力ありがとうございました。
次回のホームカミングデイは
2012 年 10 月 20 日(土)開催の予定です。

UTFestival 実行委員長からのメッセージ

卒業生活動の活性化のため、好評イベントをスピンオフ。新しいコミュニティづくりを促進していきたい

ご来場いただいた皆様ありがとうございます。今回 UTFestival の実行委員長を務めさせていただいた櫻井と申します。

私たちの目標は「UTFestival」を、卒業生同士がつながりを再確認できるようなイベントにすることでした。「ホームカミングデイ＝卒業後も『東大に入ってよかった』と思っていただけるような新たなイベント」にしたいと思い、若手卒業生、在校生中心に約 50 人程度の有志により、企画運営をしてまいりました。

小宮山前総長、本田先生に熱中講義の講師を引き受けていただいたり、本郷商店街の皆様のご協力を得て銀杏並木にビアガーデンを設置したりと、多くのみなさまのご協力の下、様々なイベントを実現させることができました。同級生対談に出ていただいた 98 年卒の先輩から、「素晴らしい同期がいて、素晴らしい後輩がいる素晴らしい学校だったんだなと改めて感じました」というありがたいお言葉をいただきました。また「のびのび広場」などでは、家族連れでホームカミングデイを楽しむ姿も多くみられ、卒業生だけでなく家族も含めて楽しめるイベントという我々の目標に近づけたのではとうれしい気持ちで見ていました。

企画にご協力いただいた皆様、卒業生室を中心とした大学の皆様、そしてご来場いただいた卒業生の皆様のおかげで作り上げられたイベントだと思っております。本当にありがとうございました。

また来年以降もホームカミングデイに皆様とお会いできるのを楽しみにしています。

UTFestival 実行委員長 櫻井 康彰（2007 年法学部卒）

東京大学 卒業生室の活動

卒業生室では、卒業生との緊密なネットワークの形成に向けた活動として、生涯学習プログラムの開発・開催、卒業生によるボランティア活動の支援、卒業生と大学を結ぶオンラインコミュニティ(TODAI for tomorrow)による卒業生ネットワークの拡充に努めています。今後は外国人卒業生への情報配信の充実など海外を含めた卒業生とのネットワーク拡充も図っていく予定です。ここでは、現在行われている卒業生室の活動を簡単にご紹介しましょう。

東大ベンチャースクエア

東京大学の中に、現役研究者・現役学生の枠を超え、卒業生をも巻き込んだ形での起業文化醸成の場づくりを推進していくのが目的。東大ワールドカフェから派生し、東大発のベンチャーを生みだす場作りを目的に産学連携本部のアントレプレナー道場関係者との共同イベントとして実施している。主な活動は以下の通り。

①卒業生である起業家、起業マインドの強い卒業生、あるいは起業支援のプロである卒業生に対して定期的会合の場を提供し、起業家精神溢れる現役研究者や現役学生との交流を通じて、広いネットワークの構築と、情報交換の促進を図る。

②東大卒起業家、あるいは東大生起業家等による講演、あるいは体験談を披歴する場を可能な限り設け、お互いが学び、刺激し合う状況を、様々な形で設定する。

③こうした交流の“場”を通して学習し、本学に起業文化を醸成するための様々な新たな創意工夫・仕掛けを発案し実行する。

グレーター東大塾

先端専門性に焦点をおき、現実社会の身近なテーマを取り上げ、塾長となる教授のもとに展開するユニークな講座。一般教養の講義というレベルを超えて、大学と社会が連携して第一線の課題に取り組み、問題解決のネットワークを構築するのが目的である。10月4日からは第二弾として、大学院新領域創成科学研究科・飯笹幸吉教授を塾長とした「深海資源戦略」講座を開講中。海洋アライアンスが中心となり、主として卒業生を対象にした先端かつ専門的テーマ、今回は、熱水鉱床、マンガンクラスト、メタンハイドレートにスポットを当てた講義内容となっている。

グレーター東大塾

講義をする飯笹教授

海外大学院留学説明会

ボランティア活動支援プログラムのひとつとして、東京大学の卒業生を中心とした海外大学院留学に関する情報提供、説明会等の開催などを行う団体 UT-OSAC（Unviersity of Tokyo, Overseas Study Advisory Community）を支援している。説明会等の活動は夏冬の年2回の予定。12月18日（日）には海外の大学院へ学位取得を目的とした正規課程修学のための留学説明会を開催予定。出願から渡航・修学のプロセスに始まり現地での生活、文化事情や金銭事情までを、留学経験者が、もっと日本の優秀な方々に世界に羽ばたいてほしいという願いを込めて語る。海外の大学院へ留学を志している人、具体的に準備中だが、これでいいのか自信がなくて経験談を聞いてみたい人から、挑戦してみたいけれどどうしてよいのか分からない人、就職のことが気になって一歩踏み出すことを恐れている人まで、どなたでも参加可能である。

海外大学院留学説明会

熱心に聞き入る参加者（2010年12月）

東大クエストサロン

東大ワールドカフェに集まった卒業生が、あるテーマについて、それぞれの知見を持ち寄り、より深く討論していく新しいサロン型プログラムとして、東大ワールドカフェ幹事会有志が中心となって実施している。卒業生にとって立場・分野を超えて関心の高いメイン・テーマを設定し、それに関する卒業生からの発表と対話を通して、お互いの知恵を交流。発表と対話の結果をレポートとしてまとめるが、成果物よりも交流を通しての個々の参加者の気付きに重点をおく。第1回は2012年1月または2月に「リーダーシップ」をテーマに開催予定。

問い合わせ先：本部卒業生室（卒業生課） 内線21216

Designed by deema :D

特集

平成23年度第1回学生表彰「東京大学総長賞」授与式開催

平成23年度第1回（秋）学生表彰は、学業以外の課外活動等を対象として募集を行い、合計21件の推薦をいただきました。学生表彰選考会議の厳正なる審議の結果、個人3件、団体1件の計4件が受賞者として選出され、10月25日に授与式が開催されました！

日　時

10月25日（火）
17：00～18：00

大学院数理科学研究科
大講義室
（駒場Ⅰキャンパス）

総長賞を授与されるクーさん

総長賞を授与される
冨安さん

プレゼンテーションをする
高橋さん

プレゼンテーションをする
東京大学丁友会RoboTech
代表　紺野さん

受賞者全員との記念写真

授与式では、総長から表彰状と記念品が受賞者に贈呈された後、各受賞者から今回の受賞内容に関するプレゼンテーションが行われ、それぞれの活動に対する思いや関係者への感謝の意等が述べられました。

なお、本授与式には、本学学生、サポートいただいた関係者、教職員、本学OB・OG等、約150名が参加し、賑わいのある祝福と交流の場となりました。

懇談会では受賞者の作品によるパフォーマンスもあり、来場者と受賞者との積極的な交流が促されました。

丁友会RoboTech作成の
マシンによるパフォーマンス

式　次　第

奏楽　東京大学音楽部管弦楽団
（平成14年度第2回受賞団体）演奏

《授与式》
- ○開会挨拶
- ○選考結果報告
- ○表彰状及び記念品の授与
- ○総長挨拶
- ○受賞者プレゼンテーション
- ○記念撮影

《懇談会》
懇談
「ただ一つ」斉唱　運動会応援部
（平成14年第1回受賞団体）

受賞者の皆様の更なる
ご活躍を期待します！

受賞者紹介

【個人】３件

冨安亮輔（大学院工学系研究科博士課程1年）

冨安氏は研究者としての立場から東日本大震災の被災地を支援するために、今年4月に本学高齢社会総合研究機構による「コミュニティケア型仮設住宅」の提案づくりの中心的メンバーを務めた。さらに、設計事務所に勤務していた経験を生かし、提案を受けていただいた釜石市・遠野市の仮設住宅の基本設計を監修し、遠野市に常駐して現場監理にも携わった。仮設住宅の竣工前には関連する自治体や行政との調整役を担い、被災者の受入れ体制を築いた。これらの活動が認められ、7月から遠野市の都市計画課非常勤職員「住まいのコーディネーター」として委嘱され現地にとどまり、被災者の入居後もコミュニティ形成の支援活動を継続している。こうした冨安氏の一連の支援活動は、本学における研究成果を直接的な社会貢献に結び付けた取組みであり、本学の名誉を高めたとして評価された。

KU, Ka Tsai（法学部3年）

クー氏は、日本からの輸入品に対する風評被害拡大の防止など、東日本大震災に関する正しい情報を提供すべく、母国シンガポールにおいて「9.0・Voices From The Ground」というチャリティーコンサートを開催した。このイベントにおいて同氏は、在日シンガポール留学生協会の副会長として委員会メンバーや友人を動員し、日本への多くの寄付金を集めるとともに、シンガポールの新聞やテレビによって同イベントが紹介されたことで、同国内での復興支援啓蒙活動に大きく寄与した。その後もNGOの企画や個人ボランティアとして被災地で精力的に活動を継続しており、宮古市ではシンガポール大使館の企画に同行し、チーム全体の装備担当を委任されている。こうした経験をもとに、本学における第2回ボランティア報告会で発表したほか、活動レポートやビデオ・プロジェクトの編集に携わるなど、幅広い手段によって周囲にボランティアの必要性を説き続けている活動が高く評価された。

髙橋亮（教養学部文科Ⅱ類2年）

髙橋氏は、G8首脳会談をモデルとした学生による国際会議「G8ユースサミット」において日本の内閣総理大臣の役割で各国との交渉にあたり、東日本大震災への国際的支援のあり方や国連をはじめとする多国籍機関の改善などについて議論を行った。また、「ジャパンタイムス」でも記者として活動し、人権問題についての記事を同紙や米TIME誌に掲載している。ハーバード大とアジアの学生が交流するプログラムに本学代表として参加し、この活動は本学の国際交流活動奨励事業に採択されている。さらに、教養学部の初年次教育プログラムとして「東大の白熱教室」を企画・実施し、ハーバード大学教授サンデル氏のテキストを参考に、学生間での英語による議論の場やその背景となる哲学的視点を提供した。以上のような国際性の高い、様々な分野での卓越した活動が他の学生の範となるとして、高く評価された。

【団体】１件

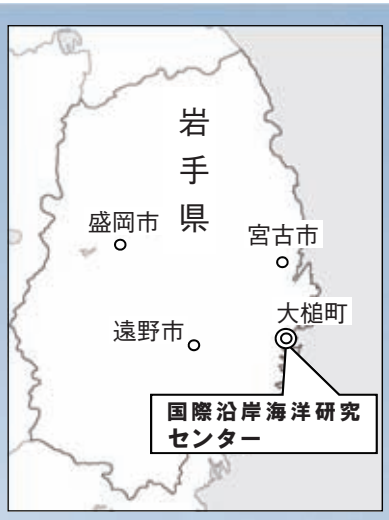
東京大学工学部丁友会RoboTech

東京大学工学部丁友会RoboTech(代表　紺野一樹さん)は、NHK大学ロボコン2011において国内の他大学に大きな差をつけて6年ぶりの優勝を果たし、日本代表の座を獲得した。国際大会であるABUアジア・太平洋ロボットコンテスト2011がタイ・バンコクで開催され、アジア太平洋地域を中心とした18カ国から代表が集い、RoboTechは日本代表として出場した。同大会では惜しくも優勝こそ逃したものの、同団体のロボット群の独創的な設計、高度に洗練されたソフトウェア、信頼性の高いメカトロニクスなどが高く評価され、最も名誉な賞とされるABUロボコン大賞を日本勢としては9年ぶりに受賞した。こうした優れた成績に加え、大会期間中はアジア各国の大学生とロボット技術に関する熱心な情報交換を行い、国内でも本学の五月祭・駒場祭へのロボット展示企画参加や教養課程の全学体験ゼミナール、工学部の創造的ものづくりプロジェクトへの協力を通して、本学における学生の自主的で真摯なものづくり活動を国内外に広く知らしめたことが高く評価された。

■本件問合せ先：本部学生支援課　山形・土井（内線：22514）

特集 東京大学基金

大気海洋研究所 国際沿岸海洋研究センター 活動支援プロジェクト始まる



大気海洋研究所は、大学本部や岩手県、大槌町等と連携して沿岸センターの早期の復旧・復興に努めていきますが、被災前の規模で共同利用研究等が行えるようになるには数年単位の時間が必要と思われます。

豊かな東北の海を取り戻すため、沿岸センターは、従来の機能に加えて、津波後の海洋環境や生態系に関する調査・研究など、三陸の水産業の復興に繋がる基礎研究についても中心的役割を担っていきたいと決意を新たにしています。

着実な復興には、学内外の多くの皆様の支えが不可欠です。復興に向けてのご助言やお力添えなどの支援について、是非ともご協力賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

東京大学基金「沿岸センター活動支援プロジェクト」は、東日本大震災により被災した、岩手県大槌町にある大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターの活動を支援するプロジェクトです

被災前の沿岸センター

沿岸センターとは

沿岸センターは沿岸海洋に関する基礎研究を行う全国共同利用施設として1973年に岩手県上閉伊郡大槌町に設置され、2003年に「国際沿岸海洋研究センター」となりました。年間延べ約4,000人の利用のある研究施設で、沿岸生態、沿岸保全、地域連携の3分野からなっています。

同センターのある三陸の沖合は、親潮と黒潮の混合水域が形成され、生物生産性が高く、生物の多様性に富んだ海域として世界的にもよく知られています。設立以来、国内外の関連研究者の方々と協力して、岩手県を中心とした沿岸域における海洋科学研究に大きな役割を果たしていました。しかし、2011年3月の東日本大震災で津波により大きな被害を受けました。

本プロジェクトの概要

目標額：　1億円
募集期間：　2011年6月
　　～2013年3月

研究環境復旧
- 実験器具整備
- 観測機器整備
- PC/ネットワーク復旧
- 什器整備

新船「グランメーユ」の
進水式（8月22日）

大津波は沿岸センター研究実験棟の3階まで達した
（写真奥、濃茶色の建物。3月11日）

沿岸センターの津波による被害状況

・研究棟、共同研究員宿舎、ポンプ棟などの建物は、倒壊を免れたものの、建物内部は3階まで浸水し、壊滅的な被害を受けました。
・車庫、上屋、船具倉庫などが全壊しました。
・沿岸センター前の防潮堤が破壊されました。
・沿岸調査に貢献してきた調査船「弥生」をはじめ3隻の調査船すべてが津波で流されました（うち2隻（チャレンジャー二世、三世）は後日対岸の瓦礫中から発見されたものの使用不能）。

沿岸センターの復旧状況（被災から半年時点）

・大学本部において、救援・復興支援室の遠野分室、大槌連絡所、大気海洋研究所では沿岸センター復興準備室、同現地事務所を設置しました。
・沿岸センターの瓦礫撤去やライフラインの整備などを行いました。
・大気海洋研究所内の復興委員会において、建物を含めた沿岸センターの復興計画案の策定が進行中です。
・３隻の調査船が津波で流失した中で、一刻も早く研究観測を再開するため、新船「グランメーユ」を建造し、8月22日に進水式を行いました。さっそく新船を使った共同利用研究を開始しています。

プロジェクト内容についての
お問い合わせは…

東京大学大気海洋研究所
事務部総務チーム
電話　04-7136-6004（内線：66004）
FAX　04-7136-6039
Email　kikin@aori.u-tokyo.ac.jp

ご寄附は…　東京大学基金　検索

東京大学基金事務局
http://utf.u-tokyo.ac.jp/
電話　03-5841-1217（内線：21217）
FAX　03-5841-1219
Email　kikin@adm.u-tokyo.ac.jp

NEWS

一般ニュース

一般

高齢社会総合研究機構
スウェーデン－日本 高齢社会シンポジウム開催される

9月21日（水）～23日（金）の3日間、スウェーデンウプサラ大学において、スウェーデン－日本 高齢社会シンポジウム「Conference on Aging Societies a Japanese-Swedish Research Cooperation」が開催された。主催はウプサラ大学（スウェーデン）と東京大学、共催者に日本学術振興会、後援に在日スウェーデン大使館の協力の下行われた。本会議は2009年秋に本学において開催された日本－スウェーデン 高齢社会シンポジウムを受けて開催された、第2回会議である。今回日本からは、松本洋一郎理事（副学長）を筆頭に、本学所属の教員や大学院生を中心とした研究者、及び本学高齢社会総合研究機構が主催する産学連携ネットワーク参加企業からの参加者、計43名が訪瑞した。

1日目の午前中は、高齢福祉施設のサイトビジットが行われた。午後からは、Anders Hallbergウプサラ大学総長、渡邊芳樹在スウェーデン特命全権大使、松本理事（副学長）、Eva Nillson-Bagennholm氏（スウェーデン社会福祉省）、Peter Egardtウプサラ市長、佐野浩日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター長の挨拶に続き、Barbro Westerholmウプサラ大学教授、辻哲夫高齢社会総合研究機構教授の基調講演が行われた。2日目は、「社会保障と政策」、「生命医科学研究」、「テクノロジー」の3つの専門分野に分かれての両国関係者間でのワークショップ、及び研究者と企業によるポスターセッションが開催された。3日目は地域社会における実践型プロジェクトの紹介が行われた。

サイトビジットにて高齢福祉施設を見学

各発表後には、両国関係者でディスカッションが行われ、高齢化に関する両国の現状や課題認識、政策、産官学連携の取組み、新たなテクノロジーの開発等、幅広い分野にわたって活発な意見交換と相互理解が深まり、非常に充実した内容となった。

レセプションにて。Anders Hallbergウプサラ大学総長（左）と松本洋一郎理事（副学長）（右）

最後に、Lars Magnussonウプサラ大学教授、鎌田実高齢社会総合研究機構長の挨拶があり、本会議は閉会した。今後も、両国の密接な協力関係の下、高齢社会の課題解決に向けた研究と実践を本学として取り組んでいく。

ウプサラ大学大講堂における講演の様子
（長寿社会のまちづくりの講演をする秋山弘子特任教授）

一般

産学連携本部

東大発バイオベンチャー ペプチドリーム㈱が日本学術会議会長賞を受賞
—第９回産学官連携功労者表彰—

我が国の産学官連携の進展に寄与する目的で開催されている産学官連携功労者表彰（内閣府、総務省等主催）の受賞式が９月22日（木）、東京国際フォーラムで開催された。大学や公的研究機関の産学連携において、大きな成果を収めたり、産学連携の推進に多大な貢献を果たした成功事例に関し、その功績を称えようと、平成15年から毎年実施されている。第９回目となる今回の表彰式には約450名が参加し、関係者の表彰を祝った。

本学産学連携本部からは、バイオベンチャー企業 ペプチドリーム㈱が栄えある日本学術会議会長賞を受賞。独創的な複数の技術を組み合わせることで、低分子医薬品、抗体医薬品に次ぐ新しい創薬分野として、特殊ペプチドを創薬プラットフォームシステム「RAPIDシステム」として確立した功績が認められたためである。従来の受託研究型ではなく、共同研究開発パートナーとしてのベンチャーを確立し、世界の製薬企業と比肩しうるビジネスモデルを構築した点についても高く評価された。

設立は2006年。同社のExecutive Advisorであり、開発者の理学系研究科 菅裕明教授が当本部の関連機関である㈱東京大学TLOや㈱東京大学エッジキャピタルのバックアップを受ける形で、共同経営者のCEO窪田規一社長とともに起業した。社名には、菅教授が長年の研究より得た、特殊ペプチド創薬技術の高い可能性への期待が込められている。実際、国内外の製薬企業との共同研究の推進により、平成19年度から開始された共同研究・受託研究での売上は当時6,000万円であったが、平成22年度上半期実績で５億6,500万円を超えるまでに成長を遂げている。

同社の強みは、「RAPIDシステム」の高い技術により世界初かつオリジナリティの高い創薬開発を見込めることである。そのため創薬ターゲットを研究する研究機関と連携する際に、創薬会社でありながら共同研究開発パートナーとしての地位が与えられることで、従来のバイオベンチャーにはない独自のビジネス戦略を展開できる。通常、膨大な費用がかかる新薬開発コストの削減・画期的な新薬開発を模索する世界中の製薬会社から信用を得ており、現在、９カ所の公的研究機関との共同研究が行われている。同システムを使用することで、通常は数年程度かかる医薬品候補の探索において、初期のスクリーニング段階で成功確率の高いヒット化合物としての特殊ペプチドを選択・創出する過程を約２週間と短縮。上市（※薬を市場に出すこと）までにかかる開発期間を短縮できるとあって、国内外の製薬会社から評価が非常に高い。オリジナルの創薬開発も並行して目指しており、医薬品として上市がされた場合には、１製品あたり毎年20～30億円のロイヤリティが発生する大きなマーケットともなりうる。

菅教授は「今回の受賞は、東大TLOや東大エッジキャピタルをはじめ、さまざまな方々の努力の結晶として、私たちが開発した技術に対して頂いた賞。大変意義深いものです」と挨拶。「弊社は窪田社長の手腕が素晴らしいことをはじめ、CSOの Patrick C Reidが海外の製薬会社との交渉を仕切るなど、分業化がうまく機能し、成功を収めることができました。私個人としては、会社の広告塔として、今後は本来の使命である教育と研究にまい進しながら、新しい技術の開発も手掛けていきたいと思っています」とし、一企業としての成功の後に続く、オリジナル創薬の開発を視野に入れた成功を楽しみに待ちたいとしている。

菅研究室（東京大学GCOE）：
http://d.hatena.ne.jp/TodaiGCOE/20110411

ペプチドリーム㈱：
http://www.peptidream.com/

表彰状を受け取る菅教授（中央）と窪田社長（左）

一般

本部奨学厚生課

東京大学東日本大震災被災者特別援助・さつき会奨学金受給者証書授与式を開催

東京大学さつき会（東京大学に在学したことのある女性及び女子在学生により構成）のご寄附により、「東日本大震災被災者特別援助・さつき会奨学金」の受給者証書授与式が、９月28日（水）に、さつき会幹事の方々及び関係教職員の臨席の下に本部棟で開催された。

本奨学金は、東日本大震災による影響で経済的困窮に陥った本学女子学生を対象に、学生生活に支障のきたすことのないよう奨学金を支給するものである。審査の結果、３名が奨学生として選考された。

さつき会・永沢裕美子代表幹事から本奨学金が創設された経緯が述べられた後、受給者３名に受給者証書が手渡された。

また、江川雅子理事からは、「今回の震災で被災された家庭の学生の皆さんには心よりお見舞い申し上げます。このたび、さつき会からの温かいご寄附により被災学生に対して奨学金が支給されることになりました。ご家族ともに大変ご苦労されている状況かとは思いますが、しっかり勉学に励んでほしい」旨の挨拶があった。

次いで、受給者の３人からは、さつき会に対する謝辞とともに、本奨学金受給者としての自覚を持ち、より一層努力していきたい旨のスピーチがあった。

受給者との記念撮影

一般

産学連携本部

東京大学産学連携協議会「平成23年度第1回東京大学産学連携協議会アドバイザリーボードミーティング」開催

産業界と本学との一層の連携促進を目的として、東京大学産学連携協議会「平成23年度第１回アドバイザリーボードミーティング」を９月30日（金）、本部棟12階大会議室において開催した。同協議会は2005年１月に設立され、会員数は736社（2011年10月現在）。産業界と本学における双方向性の産学連携推進のプラットフォームとして、双方が社会に寄与する価値の創造を多様な形態で実現可能とするための重要な基盤と位置付けている。

本学側からは濱田純一総長をはじめ各理事、保立和夫産学連携本部長らが出席。産業界側からはアドバイザーとして、野村ホールディングス㈱常任顧問 氏家純一氏、㈱日立製作所取締役会長 川村隆氏、㈱小松製作所取締役会長 坂根正弘氏を迎え、双方向性による産学連携推進についての議論が展開された。

今回は３月11日に発生した東日本大震災後、初めての開催ということから、テーマを震災復興に設定。冒頭、濱田総長は「この半年は東日本大震災後の対応に追われましたが、今後も具体的な支援・復興も含め、全力を尽くし、今の状況に対応してまいりたいと思っております。具体的な当面の活動と同時に中長期的に、私たちの研究力、教育力をもう一度強め、産学連携本部としても、これまで以上に産業界のみなさま方と深い連携をとりながら、総合的な力を発揮していけたらと思っています」と挨拶した。

続いて行われた産学連携本部の組織・活動報告の中で、保立産学連携本部長から、従来の活動に加え、今年３月３日に開催された「第１回国際産学連携フォーラム」をはじめ、㈱東京大学エッジキャピタルの投資先で、７月21日に東証マザーズへ上場した㈱モルフォや、４月から始まった文京区との連携による「社会起業」の活動、起業家と学生との人的交流を図る目的で今年から始めた「ベンチャースクエア」などについて説明があった。

今回のテーマでもある東日本大震災発生後の本学における対応については、前田正史理事（副学長）が救援・復興支援室長の立場から、環境放射線の計測・発信をはじめ、被災地での支援拠点の開設、東大教職員の救援・復興支援活動、ボランティア隊の派遣、基金プロジェクトの立ち上げなど、大震災発生後に本学が行った主な対応や活動について時系列に説明した。それに対し、産業界からは「震災発生後、非常に早い時期に、自発的な活動を含めてこれだけ広範囲に、早く深く幅広い活動がされていて大変感心しました」といった感想をいただいた後、それぞれの立場から、①災害予知・事前兆候②原子力の応用技術③復興特区・復興庁への働きかけ④災害に強く高齢者に安心な社会⑤大学発ベンチャーの成果、フォローアップ⑥スタンフォード大学と本学との違い――などについて質問や要望をいただいた。

政治、経済の分野まで含めた、本学への期待に関したところでは、「日本の政治、社会、経済全体に対する自信が失われている。解決するための道筋を、ぜひ東京大学から政府に伝えていってほしい」といった切実な要望が出された。

最後に松本洋一郎理事（副学長）が「さまざまな知の源泉が本学にはありますが、“部品”を調達し、それらとどのようにうまくコンバインさせていくのかが、ある意味、大学執行部の役割になるのではないかと思っています。それが今回の大震災から得た教訓であり、産学官政が一体になって、うまく活かしていけるような構造を本学の中で作りつつ、発信していければと思っています」と締めくくった。

今回の開催を期に、大震災での教訓を踏まえ、さまざまな産学連携の成果が個別、具体的に創出されることが期待されている。

東京大学産学連携協議会：
http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/jp/kyogikai/message.html

あいさつする濱田総長

左から前田理事（副学長）、濱田総長、清水孝雄理事（副学長）

前列左から２番目より、㈱小松製作所取締役会長 坂根正弘氏、
濱田総長、㈱日立製作所取締役会長 川村隆氏、
野村ホールディングス㈱常任顧問 氏家純一氏

一般

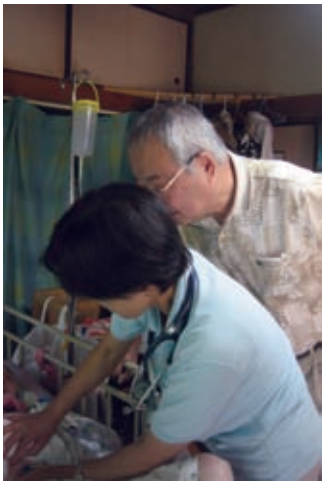
高齢社会総合研究機構

柏の在宅医療研修　盛況のうちに終了

10月１日（土）、４ヶ月強にわたり柏キャンパスで開講されていた「柏在宅医療研修試行プログラム」が最終日を迎えた。同研修は、本学高齢社会総合研究機構が柏市・UR都市機構とともに設置している柏市豊四季台地域高齢社会総合研究会の「長寿社会のまちづくり」構想（http://kashiwa-toyoshikidai.org/pages/20000）に位置付けられている在宅医療の推進のための取り組みのひとつ。

多職種によるグループワーク
（緩和ケアについての症例検討）

受講者は、柏市医師会の推薦を受けた現役の開業医６名を中心に、歯科医師、薬剤師、訪問看護師、介護支援専門員（ケアマネジャー）、病院職員など計30名。冒頭２日間の集中オリエンテーションに始まり、多職種によるグループワーク等を盛り込んだ計４回の多職種連携研修、計８回（延べ32時間）の在宅実地研修（開業医６名のみが対象）で構成される。プログラムの特徴は、①現役の開業医が診療の合間を縫って実地研修に出向くこと、②多職種による議論の場が研修の中に意図的に埋め込まれていること、③受講後の現実の連携との連続性を考慮し、同一市町村内の多職種を受講対象としていること、④本学単独の取り組みとしてではなく、柏市医師会など地域の関係団体を巻き込む過程をも含めて系統的に企画されていることなどである。



実地研修風景（開業医が訪問看護に同行）

最終日のシンポジウムでは、大島伸一氏（国立長寿医療研究センター総長）、太田秀樹氏（全国在宅療養支援診療所連絡会事務局長）など全国の在宅医療推進のリーダーの臨席のもと受講者が登壇し、各職種の立場から、研修で得た学びとともに今後の柏市の在宅医療に臨む態度が力強く表明された。終了直後の受講者評価では、在宅医療に対する前向きな意識の変化とともに、開業医６名中２名が在宅患者に対する24時間の連絡体制をもつ在宅療養支援診療所の指定を新たに取得するなどの受講効果を認めている。

同研修は今後、今回の試行結果に基づき必要な改善を行った上で、全国の在宅医療推進を念頭に、他地域への波及を目指す。

受講者・講師ほかによる集合写真（研修最終日）

一般

本部社会連携推進課

平成23年度「東京大学稷門賞」授賞式が挙行される

平成23年度「東京大学稷門賞」の受賞者が、長島雅則様、株式会社中島董商店代表取締役中島美奈子様、株式会社董花代表取締役西尾正弘様、三菱重工業株式会社取締役社長大宮英明様の３件に決定し、授賞式が10月４日（火）17時30分から山上会館において挙行された。

本表彰は、私財の寄附、ボランティア活動及び援助等により、本学の活動の発展に大きく貢献した個人、法人又は団体（現に在籍する本学の教職員及び学生は原則として対象外）に対し授与するもので、平成14年度より毎年度行っている。授賞式では、選考結果の報告、各受賞代表者への表彰状及び記念品の贈呈があり、その後、総長の挨拶、受賞者からの挨拶が行われた。

また、授賞式に引き続き、レセプションが行われ、受賞者及び受賞関係者と本学関係者との懇談が和やかな雰囲気の中で行われた。受賞者とその授賞理由は以下のとおりである。

◎　受賞者

１　長島 雅則　様

受賞理由：「長島雅則奨学基金」を設立し、海外派遣奨励費（海外留学支援金）及び外国人留学生支援のために活用され、行動シナリオ「FOREST2015」に基づき本学の教育における国際化推進の実現に多大な貢献をしていることが評価された。

２　株式会社中島董商店代表取締役 中島 美奈子　様
　　株式会社董花代表取締役 西尾 正弘　様

受賞理由：故中島雄一氏の篤志により株式会社中島董商店並びに株式会社董花から、農学生命科学研究科の食の安全をはじめとするフードサイエンスの研究拠点となる「フードサイエンス棟」（平成22年11月竣工）の建設費を支援いただき、同研究科の教育・研究の一層の充実に貢献したことが評価された。

３　三菱重工業株式会社取締役社長 大宮 英明　様

受賞理由：三菱重工業株式会社による寄付講座「航空イノベーション総括寄付講座」(平成21年８月設置、５年間）を設置し、国際的な分野横断な産学官連携により、総合的・包括的な活動を行い、小型ジェット旅客機であるリージョナル・ジェット機の展望を軸とする成果を挙げたことが評価された。

長島雅則様及び推薦部局関係者、総長との記念撮影

株式会社中島董商店代表取締役中島美奈子様、
株式会社董花代表取締役西尾正弘様及び推薦部局関係者、
総長との記念撮影

三菱重工業株式会社取締役社長大宮英明様
及び推薦部局関係者、総長との記念撮影

一般

産学連携本部

「電力エネルギーにおける技術革新」—第21回科学技術交流フォーラム開催—

東日本大震災以降、日本を襲った電力エネルギー危機を克服する技術的な方策が強く求められている。これまで長期的な視点で研究開発されてきた新技術を開発の時間軸を短縮させて一刻も早く実用化し危機克服に貢献すべく、第21回科学技術交流フォーラム「電力エネルギーにおける技術革新—東日本大震災を踏まえ加速すべき新技術—」を10月12日（水）に開催した。震災後初の開催となる今回は、実用化を急ぐべき新技術について、現状と課題、研究開発の方向性や手段等を産業界に広く訴え、産業界と大学の力の結集を呼びかけた。

本フォーラムは東京大学産学連携協議会会員企業等を対象として、2005年の第１回開催以来、本学の研究者が研究成果や「知」を発信する産学出合いの場として、毎回好評をいただいている。今回は小柴ホールに学内の研究者や学外の企業から170名を超える方々が参加し、大変盛況なフォーラムとなった。

冒頭、松本洋一郎理事（副学長）が「電力エネルギー問題には政策方針が大きく影響することから、国全体として今後のエネルギー戦略の方向性に関する議論をしていますが、震災から７カ月経過した現在もなお、遅々として進んでいない印象があります。このフォーラムでは今後の電力エネルギーにおいて重要な役割を果たすと思われる技術について、実用化への可能性、道筋をともに検討します。ここでの議論を通して新たな知の共創に向けた場ができることを願っています」と挨拶した。

挨拶する松本洋一郎理事（副学長）

続いて行われた研究発表では、産学連携の可能性に関して、各分野における専門の研究者が最新情報を発信。「日本型スマートグリッドの構築」と題した講演で、新領域創成科学研究科の横山明彦教授は「太陽光発電の大量導入には、日本型のスマートグリッドを検討する必要がある。これは、蓄電池などの新しいハードウエアと従来型の発電設備を総合的にコントロールする技術であり、需要家の利便性も損なわない」と提起した。そして、現時点ではコストが高い蓄電池の利用量を抑え、ヒートポンプ給湯機や電気自動車の蓄電池をコントロールしながら利用する技術について、３～５年のスパンで実用化に向けて開発を加速している研究成果を披露した。

「高性能蓄電デバイス開発に向けた革新的基盤研究」の講演では、工学系研究科の水野哲孝教授が、本学の超高輝度放射光ビームラインを使用し、３次元のXPSを数十ナノの分解度でマッピング可能な装置による電池研究への適用方法を紹介。「構造制御が難しい固体をどのように制御するかについて原子レベルにひも解き、そこから逆に答えを探しだすことで、原子レベルでの蓄電デバイス開発を行っている。蓄電池、蓄電デバイスの研究開発にはイノベーションが求められており、独創的な発想、かつ緻密な研究の両方が必要」とした。

「固体酸化物形燃料電池（SOFC）の高信頼性・高効率化に向けた要素技術開発」の講演では、生産技術研究所の鹿園直毅教授が、世界的なエネルギーの見通しや、従来型の天然ガスとの比較で可採年数が５、６倍といわれる「Shale gas」の存在などを挙げたうえで、「いかに燃焼から脱却して化学電池に置き換えていくか、極めて遅く高く複雑な電池をいかに実用可能なものにしていく

かが、今後の大きな課題。高温作動型の燃料電池である固体酸化物形燃料電池（SOFC）で高効率化を進めれば、電力量は増やしてもエネルギー使用量は減らすことが可能であり、SOFCはその道のカギを握るデバイスである」とした。

「熱電発電の実用化の可能性と高効率化につながる新材料開発」の講演で、新領域創成科学研究科の木村薫教授は「一次エネルギーの70％が廃熱とされる現状の中で、エネルギーを再利用する熱電発電は、変換効率の低さから実用化が遅れていた。しかし、小型・分散電源として有望であり、大量生産によるコストダウンも考えられることから、実用化の可能性は十分ある」として、高効率化につながる新材料である「13族正20面体クラスター固体」と「13族一遷移金属クラスター固体」の開発について説明した。

先端科学技術研究センターの岡田至崇教授は、講演「高変換効率を実現する革新的太陽電池技術」の中で、太陽光発電の方向性を示唆。「太陽光発電の低コスト化のシナリオとして、現在、23円／kWh、実用モジュール16％であるが、当初想定の2050年から30年前倒しで2020年には７円／kWh、超高効率40％を達成すべき。ひとつの方向性として、パネル型と比較して、同じ設置面積であれば発電量が高い集光型を提案する」として、欧米で重要視されている集光型太陽光発電について、国内メーカーへ意識改革を呼びかけた。

工学系研究科の松橋隆治教授は、震災後の状況下において、原子力発電を拡大・維持・縮小した場合のシナリオ分析を紹介。講演「東日本大震災以降の日本のエネルギー政策と低炭素化施策について」の中で、「特に影響が大きいのはCO_2削減率で、2030年には５～14％程度の差が出ると予想されるため、GHG（温室効果ガス）の削減目標である2020年に1990年比25％削減は非常に難しい状況。今後はエネルギー政策と低炭素化政策を推進する中で、需要側の省エネルギーを進めると同時に、創エネ製品の普及を加速することが重要」とした。

講演会では実用化へ向けた活発な議論が展開された

転換期を迎え、電力エネルギー分野において大きな試練に直面している日本。需給バランスの総合的管理、エネルギー利用の高効率化、未利用エネルギーの活用、低炭素化戦略など、現在の日本において、重要課題に関わる新技術を取り上げた今回のフォーラムでは、現状と将来への可能性について、参加者からも多くの質問が出され、日本復興へとつながる議論が展開された。

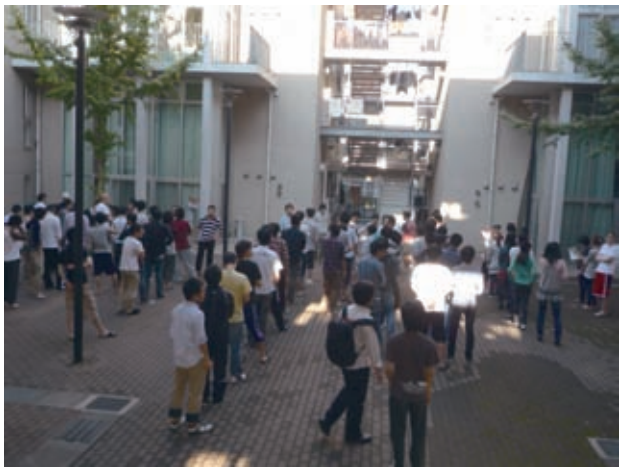
一般

本部奨学厚生課

豊島国際学生宿舎で消防訓練と「寮祭」を実施

10月16日（日）本部奨学厚生課所管の豊島国際学生宿舎において消防訓練および寮祭が行われた。

15時頃、５階のキッチンにて出火した想定で行われ、宿舎の自治会委員が館内放送を通じて避難を呼びかけるとともに、避難誘導を行った。参加した人数は97名であった。当日は天気も良く、比較的スムーズに訓練をとり行うことができた。避難終了後に本部奨学厚生課および建物の管理を委託している業者のスタッフから講評があり、避難時の注意点や消火器の操作方法などが説明された。



１階の広場に避難する宿舎生

当日18時からは宿舎１階の広場と各コモンを利用して寮祭が行われた。この寮祭は、宿舎生及び近隣の住民とコミュニケーションを深めることを目的として毎年開催されている。同じ宿舎で生活していてもなかなか話すことがない宿舎生同士も、この機会に親交を深め、楽しく談笑する姿が多くみられた。

各コモンのキッチンでは留学生が自国の料理をふるまうなど国際学生宿舎らしい一面もみられた。留学生の中には10月に入居したばかりの者も多いが、寮祭への参加をきっかけに、宿舎生活により一層とけこむことができたようである。

また今年はチャリティーバザーを行い、収益金を東日本大震災の義援金として寄附することとした。

コモンではさまざまな種類の料理がふるまわれた

一般

海洋アライアンス

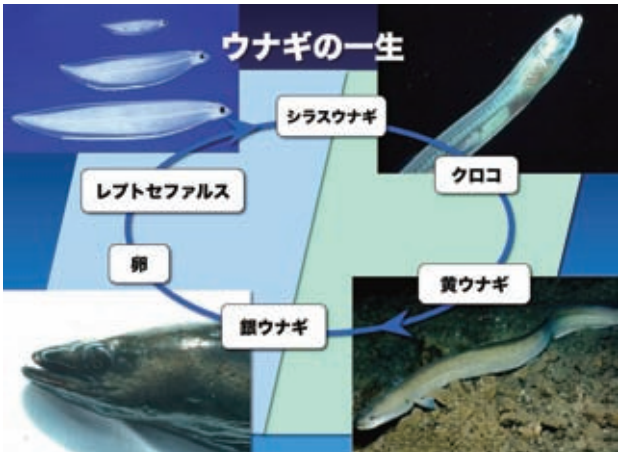
子供たちに海の研究の最前線を伝える出前授業を開催

海洋アライアンスでは、海に関する教育活動の一環として、小中学校や高校などへの出前授業を行っている。

10月17日（月）、青山潤特任准教授（大気海洋研究所）が千葉県柏市立西原小学校の２年生と保護者を対象に、「海を旅するもの」というタイトルで授業を行った。

魚類や甲殻類の幼生が、親とはまったく異なる姿で海を旅するという話に始まり、保護者から強く要望のあった最新のうなぎ研究へと展開してゆく。数千キロを旅するうなぎの子供の採集や潜水艇による観察の様子から、耳石を調べて誕生日を明らかにすることまで。まさにウナギ研究の最先端について、美しい写真を交えて説明した。中でも、史上初となった産卵場での親うなぎの捕獲や、卵を採集した際の研究船上での臨場感あふれる映像が流れると、子供たちだけなく、後ろに控えた保護者達までもが食い入るように見つめていたのが印象的だった。

結局、40分に及ぶ授業中、低学年ゆえ、途中で騒ぎ出すかも知れないと心配していた校長先生も驚くほどの集中ぶりだった。



出前授業で使用した資料

終了後には「何でうなぎがいるのか？」など難しい質問もあったが、生徒たちからは、「映像が綺麗で水族館に来たみたいだった」、「船で作業している先生達の姿が格好良かった」という感想があった。また、保護者からは「息子は、授業では手を上げないが、積極的に質問をしていて驚いた」、「うちの子は、水族館や海の生物に興味を持っているので、朝から楽しみにしていました」などの感想があった。親子共々大いに知的好奇心を刺激されたようだ。

今後も海洋アライアンスでは、子供たちに海に興味を持ってもらえるように、最先端の研究内容を含めて色々な事柄を楽しく授業する本活動を続けてゆく。

授業終了後に生徒からお礼に花束をもらう様子

後日、生徒たちから届いたお礼の手紙

海洋アライアンスホームページ：
http://www.oa.u-tokyo.ac.jp/

一般

バリアフリー支援室

「平成23年度バリアフリー支援実施担当者研修会」開催される

バリアフリー支援室では、10月18日（火）に薬学系総合研究棟10階大会議室において、「平成23年度バリアフリー支援実施担当者研修会」を開催した。

「バリアフリー支援実施担当者研修会」は、各部局に配置されているバリアフリー支援実施担当者（学生担当及び教職員担当）のバリアフリー支援に関する理解の促進を図ることを目的に毎年開かれている。今回は、支援実施担当者以外にも障害のある学生・教職員に関わる業務に従事している者や将来的にバリアフリーに関わる業務を希望している者も受講対象とし、36名が受講した。

開会に先立ち、武藤芳照理事（副学長）から挨拶があり、本学のバリアフリー支援の現状のあらましと、受講者に対するバリアフリー支援取り組みへの期待が述べられた。

続いて、富田靖博教育・学生支援部長から、本学におけるバリアフリー支援の理念及び体制について説明が行われ、次いで、矢口隆紀バリアフリー支援室係長から、バリアフリー支援実施担当者の具体的な役割について説明が行われた。

その後、受講者36名が４グループに分かれて、「知的障害のある職員と働くにあたって」、「視覚障害・聴覚障害のある教職員と働くにあたって」、「肢体不自由のある教職員と働くにあたって」、「障害のある学生を受け入れるにあたって」の模擬事例について、準備と支援はどう行われるべきかを巡る議論を行った。各グループとも、参加者それぞれの立場からの真剣な意見交換と、活発なディスカッションが行われ、締めくくりとして討論結果が各グループから全体に向けて報告された。

最後に，池田信雄バリアフリー支援室長（総合文化研究科教授）から、全体総括ならびに閉会の挨拶があった。

開会挨拶を行う武藤理事（副学長）

活発なグループディスカッションの様子

一般

本部キャリアサポート課

知の創造的摩擦プロジェクト第13回交流会開催

10月22日(土)13時から駒場Ｉキャンパスコミュニケーション・プラザ南館において、知の創造的摩擦プロジェクト第13回交流会「あなたの“カッコイイ”を考える」が開催された。

交流会は、本学学生と各界で活躍する若手卒業生との交流を通して、学生のキャリア形成支援を目的とする大学主催のイベントで、平成17年10月に本郷キャンパスにて第１回が開催され、第13回目となった今回は、110名の卒業生と277名の学生が参加した。

開会にあたり武藤芳照理事・副学長（学生担当）から、参加された卒業生に対し休日にもかかわらず本学学生のためにボランティアでお集まりいただいたことについて謝辞が述べられた後、「国立大学法人では学生のキャリアサポート、ガイダンス等を行う必要があり、この交流会が卒業生と学生によって自主的、自発的に実施されていることは有難く誇りに思っている。僕や私『なんて』ではなく、『だから』と思えるような新しく刺激的な出会いと語らいの交流が多く生まれることを希望する」との挨拶があった。

第一部では「自分が理想とする生き方、カッコイイ生き方」について、３回のグループディスカッションが行われ、引き続き17時30分から生協食堂にところを移して第二部（懇談会）が開かれ、19時まで和やかな中にも熱のこもった会話が繰り広げられた。

本イベントの企画・運営等は、卒業生有志の集い「東京大学三四郎会」と本学学生サークル「東大ドリームネット」との協力・支援のもとに行われたものである。

開会の挨拶をする武藤理事（副学長）

熱気あふれる交流の輪

一般

本部学生支援課

第35回東京大学伊豆・戸田マラソン大会が開催される

10月23日（日）第35回東京大学伊豆･戸田（へだ）マラソン大会が静岡県沼津市戸田で開催された。大会には、本学戸田寮をスタート・ゴールとする42.195㎞のフルマラソンと、西浦市民窓口横をスタートして戸田寮にゴールする21㎞のハーフマラソンがある。５kmで500mを登る山道を含むなど通常に比べかなりの難コースだが、富士山と駿河湾が織りなす絶景のなかを走ることができるため、例年、参加者から好評を博している。

フルマラソンスタート風景

前日からの雨もスタート時には上がり、フルマラソンは133名（学生・教職員95名、卒業生25名、沼津市在住・在勤者13名）が出走し、123名が完走した。ハーフマラソンでは25名（学生・教職員11名、卒業生２名、沼津市在住・在勤者13名）が出走し、24名が完走した。

フルマラソン個人の部は、前回大会の準優勝者である本学大学院学生の貴田大樹さん（農学生命科学研究科）が３時間00分19秒で優勝を果たした。また、団体の部では、チーム「飛走会」が２大会連続の優勝となった。ハーフマラソンでは、沼津市の川口一喜さんが優勝し、上位を沼津市からの参加者が独占する形となった。また、本年度は、沼津市が共催となり、新たに11kmの新コースが設置され、沼津市高校生22名も本学参加者とともにスタートしてコースを疾走した。

沿道では、地元の方からたくさんの温かい声援があり、閉会式前には地元商工会によるお汁粉や漁師なべ、やきそばが参加者に振る舞われた。

閉会式では、総長杯、沼津市長杯等の授与並びに上位入賞者の表彰が行われ、栗原裕康沼津市長からご挨拶をいただいた後、武藤芳照理事（副学長）から「スポーツ、とりわけマラソンは人生の縮図」との講評をいただき、盛会のうちに終了した。

個人優勝者に総長杯を手渡す武藤理事（副学長）

第35回東京大学伊豆・戸田マラソン大会結果

【個人の部】＜東京大学総長杯＞

順　位	氏　名	時　間	備　　考
優　勝	貴田 大樹	3:00:19	大学院学生
準優勝	千葉 公介	3:03:18	卒業生
第３位	大井 寛己	3:06:09	卒業生
第４位	田辺 克彦	3:07:58	卒業生
第５位	小川 直哉	3:09:00	大学院学生
第６位	牧田 浩典	3:11:40	教職員

【団体の部】＜沼津市長杯＞
（チームメンバー上位3人の平均順位が少ないチーム）

順　位	チーム名
優　勝	飛走会
準優勝	スポ愛ダイエットクラブ
第３位	自走会

【女子の部】

順　位	氏　名	時　間	備　　考
優　勝	稲葉 五美	4:05:00	沼津市民

【学内の部】

順　位	氏　名	時　間	備　　考
優　勝	貴田 大樹	3:00:19	大学院学生

【バカヤロー会長杯】
（真城峠からゴールまで最も順位を上げた人）

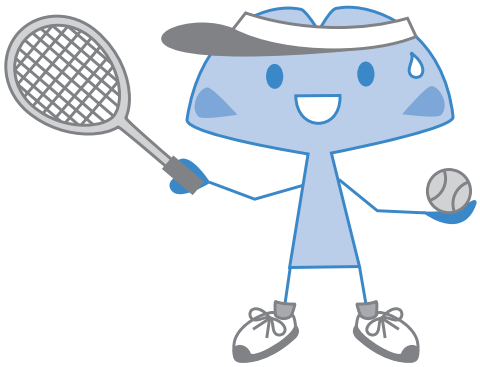
順　位	氏　名	順位変動	備　　考
74位	一條 竜也	113→74位	大学院学生

【ハーフマラソン】

順　位	氏　名	時　間	備　　考
優　勝	川口 一喜	1:37:43	沼津市民
準優勝	水野 達也	1:54:36	沼津市民
第３位	鈴木 幸善	1:57:23	沼津市民

【ハーフマラソン】（女子の部）

順　位	氏　名	時　間	備　　考
優　勝	小野 聡子	1:59:53	学部学生



部局ニュース

大学院総合文化研究科・教養学部
21 Komaba Center for Educational Excellence (21KOMCEE)竣工披露記念式典開催

大学院総合文化研究科・教養学部は、心地よい秋晴れに恵まれた９月29日（木）、学内外関係者約150名出席のもと、21 Komaba Center for Educational Excellence (21KOMCEE)（「21コムシー」通称「理想の教育棟」）竣工記念式典を開催した。

式典に先立ち、石畳に光の降り注ぐ地下１階屋外テラスにおいて、濱田純一総長、小宮山宏三菱総合研究所理事長、長谷川壽一総合文化研究科長、森稔森ビル株式会社代表取締役会長、河村潤子文部科学省大臣官房文教施設企画部長、石井リーサ明理照明デザイナー各氏により、テープカットが行われた。

その後、石井氏デザインによる「輝迸（きほう）」が印象的なオープンスペースアリーナにおいて式典が執り行われた。式典では、長谷川研究科長による式辞、濱田総長による挨拶に続き、本教育棟建設にあたり、多大なご支援を賜った森稔森ビル株式会社代表取締役会長、東京大学アクションプランに「理想の教養教育の追求」を掲げられ、本教育棟構想に当時総長として大きな役割を果たされた小宮山宏三菱総合研究所理事長から、それぞれ祝辞をいただいた。式典に引き続き、本教育棟に対する森稔氏のご貢献をたたえ名付けられたMMホールにおいて祝賀会が催された。このホールは、天井までの高さ10メートルを超えるガラス張りの施設で、天井に設置された、知の泉が湧き出る学びのオアシスをテーマとし、石井リーサ明理氏がデザインされた「光湧（こうゆう）」が、強いインパクトを与える、教育棟としては類を見ない先端的な空間となっている。

祝賀会では、前田正史理事（副学長）の挨拶、来賓の河村潤子文部科学省大臣官房文教施設企画部長の祝辞に続き、石井リーサ明理氏が照明デザインの説明をされた後、清水孝雄理事（副学長）の発声で乾杯が行われた。学生団体「室内楽の会」による弦楽四重奏が奏でられる中、懇談を挟み、来賓の池上久雄東大赤門学友会（全学同窓会）副会長、野城智也生産技術研究所長から、それぞれご挨拶をいただいた。

本学は、リベラルアーツを主体とする学部教育に力を注いできたが、時代の変化に対応した教養教育の革新を目指し、アクティブラーニング、すなわち、討議・発表・協調学習などの能動的な活動を取り入れた教養教育の開発に取り組んできている。本教育棟は、そうしたアクティブラーニングという新たな教養教育を実践する拠点であり、講義を聴き、帰るだけではなく、そこに集い、知と出会い、触れあう学習環境の創出、最先端の教育研究施設の整備を具体化するものである。

また、本教育棟は、ゼロ・エネルギービル（ZEB）を指向して建設された本学初の教育施設である。生産技術研究所との連携により、人工知能を使って空調や照明をコントロールし、自然の力を最大限に活用して低環境負荷を実現するとともに、使う側にもゼロ・エネルギーへの意識を促す工夫が盛り込まれており、新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）による「次世代省エネルギー等建築システム実証事業」の対象施設にもなっている。

列席者からは、本教育棟の先端性、独創性に強い関心が寄せられ、この充実した最新鋭の教育施設が活用され、教養教育の一層の革新・発展と、東京大学が目指す「世界を担う知の拠点」としての活動推進の拠点となることへの強い期待が表明された。さらに、本教育棟は、「理想の教育棟」計画の「I期棟（西棟）」であり、引き続き「II期棟（東棟）」建設具体化に向けて、関係者の一層の取り組みもまた求められた。

左から、石井リーサ明理氏、濱田純一総長、森稔氏、
長谷川壽一総合文化研究科長、小宮山宏氏、
河村潤子文部科学省大臣官房文教施設企画部長

21KOMCEE外観

式典の様子

榎原雅治所長による史料編纂所の事業紹介

部局

史料編纂所

セミナー「王朝の「雅」を伝える公家文庫」開催

史料編纂所では、10月１日（土）に一橋記念講堂（千代田区一ツ橋）にて「王朝の「雅」を伝える公家文庫―禁裏文庫の歴史と陽明文庫の名品―」と題する市民向けのセミナーを開催した。

本セミナーは、日本学術振興会科学研究費補助金（学術創成研究費）「目録学の構築と古典学の再生―天皇家・公家文庫の実態復原と伝統的知識体系の解明―」（研究代表者田島公教授）との共催で、本研究所の活動や史料保存事業について、また学術創成研究プロジェクトによるこれまでの研究成果を広く一般に紹介するもので、事前に新聞等で紹介されたこともあり、約250名の参加者を得ることができた。

内容は、①名和修氏（財団法人陽明文庫理事・文庫長）「陽明文庫の歴史と名品」、②尾上陽介准教授「近衛家歴代関白記録の伝来」、③田島公教授「禁裏文庫の伝来の歴史」、④榎原雅治所長「東京大学史料編纂所の事業と史料保存」の４報告で、長時間にわたるセミナーとなったが、参加者は最後まで熱心に聴き入り、本研究所の活動や古典籍・古記録等について理解していただく良い機会となった。その後、参加者からは、これからも継続して史料編纂所の史料や研究成果を公開する催しを続けてほしい、史料編纂所内での展示も積極的におこなってほしい、など熱心な要望が寄せられた。

名和修陽明文庫長による講演の様子

セミナー会場全景

部局

大学院新領域創成科学研究科

第６回新領域創成科学研究科「市民講座」開催「地球温暖化問題と原発環境汚染問題」

10月２日（日）14時より柏キャンパス柏図書館において新領域創成科学研究科主催の第６回市民講座が開催された。最近の「東日本大震災」に関するニュースでは、ほとんどが原発関連となり、地震や津波対策に関する内容は姿を消した。それほどに震災による原発事故は震災後の私達の生活に大きな影響を及ぼしている。その状況下で本「市民講座」では、気象学が専門である大気海洋研究所附属地球表層圏変動研究センター長（本研究科兼務）の中島映至教授を講師に迎え、気象が絡む原発環境汚染の広がりと温暖化問題に関して講義を開催した。

今回は参加者数106名という多数の市民が集まった。この演題内容の重要性が窺える。講座冒頭で、中島教授は1991年に起きた湾岸戦争にふれ、現場に行ってなんとか観測したいと思っても政府の許可がなかなか下りなかった話や、現場に行かないと自分の必要な情報を得ることは出来なかった点を強調した。このような地球規模の大規模大気汚染は近年10年に一度は起こっているそうだ。さらに、中島教授は「今回の震災に伴う原発事故に関しても、当初、科学者が共有できる情報がきわめて限られていた。1999年に起こった東海村JCO臨界事故の際

は、科学者等の有識者が多く臨時対策委員会に入っていたが、原子力安全・保安院体制になって、多くの専門家がさまざまな角度から問題を検討する体制になっていないような気がする。今回のような事故の場合、水素爆発後の福島地方の気象情報は極めて重要で、風向きや降水量によって、どれだけの放射性物質がどの地区に降下してくるかが大きく変わってくる。それらの予測のために大型予算を費やして開発されたSPEEDIからの情報が十分に利用されていないと思わざるを得ない。一方で、その数値シミュレーションも現状では万能とは言えない。モデルには不確実性があり、予想数値と現状の値がかなり異なる点が出てくる場合がまだある」と述べた。

このためにモデルの改善とともに、実際の観測をできるだけ緻密にその災害直後に行い、数値シミュレーションと組み合わせることが重要となる。住民配慮の問題もあるが、調査はできる限り科学的に厳密に行い、広く情報を共有することが、結局はその後の対策に役立つと思われる。

中島教授が終始主張していたのは「情報リテラシー」ということだ。「かなり前のことになるが、ある県庁の知り合いが防災関係の部署で勤務していた時、彼らは台風情報を米国のウェブサイトからも得ていたという。情報システムが発達する今日、より多くの防災情報が日本においても瞬時に公開される方向にいくであろうが、その時にその情報をいかに収集し、それを正しく理解して、冷静に判断するかが大事になる。そのために、市民のひとりひとりが科学的なものの見方を鍛えることが重要である。同時に政府・関係機関も、遅滞無く正確な防災情報を発信する必要がある」とのことであった。そして最後に、政府に任せきりの時代は過去の話であると締めくくった。

熱心な講義をしている地球表層圏変動研究センターの中島映至教授

長時間の質疑討論がなされて参加者は非常に満足していた

部局

大学院教育学研究科・教育学部
教育学部附属中等教育学校軟式野球部　東京都高等学校軟式野球秋季大会優勝

10月８日（土）に行われた平成23年度東京都高等学校軟式野球秋季大会において、教育学部附属中等教育学校軟式野球部が優勝を果たした。

都大会優勝は平成21年度春季大会以来、秋季大会における優勝は平成16年度以来のことである。

決勝戦の相手は強豪校の駒場東邦高等学校。両者無得点のまま迎えた９回表に駒場東邦に１点先取されたものの、最後まであきらめない粘りの野球により、その裏で２点返して１－２でサヨナラ勝ちした。

当日は附属中等教育学校の文化祭（「銀杏祭」）に当たっており、学校では様々な催し物が盛況に行われていた。そのため、野球部の応援には誰も駆けつけることができず、敵陣での孤軍奮闘の様相を呈する中、キャプテンもベンチで的確に指示を出し見事優勝を勝ちとった。学校に優勝の報告が届くと、文化祭もいよいよ盛り上がり、生徒たちには心も秋晴れの一日となった。

都大会優勝をうけ、10月27日（木）からの関東大会に東京都代表として出場します。生徒たちの雄姿に是非声援を送ってください。

優勝旗を持ち帰った主将と喜びの今井校長

部局

大学院新領域創成科学研究科

第７回新領域創成科学研究科「市民講座」開催「太陽光発電は原子力発電を超えるか？」

新領域創成科学研究科主催の第７回市民講座が10月９日（日）14時より柏キャンパス図書館において開催された。東日本大震災の影響で心配されていた今年の夏の電力不足をなんとか計画停電なしに乗り切ることができた。しかし、次は冬越えができるかという不安やその対策が多くマスコミで報道されている。今、家電店ではコタツが飛ぶように売れているそうである。このように震災後のキーワードに「節電」や「エネルギー問題」があり、原子力発電がその信頼性を失ってしまった今、次に期待される発電システムの１つに「太陽光発電」がある。そこで今回は物質系専攻の鯉沼秀臣客員教授の講演を行った。

鯉沼客員教授は今壮大な研究を推進している。「サハラソーラーブリーダー計画」である。JST/JICAのプロジェクトで、サハラ砂漠で太陽光発電を行うと言う計画で21世紀のアポロ計画とも言われている。突飛な発想のように思えるが、説明を聞くと理にかなっている点が多々ある。サハラ周辺にSi（ケイ素）とSi太陽電池を製造する工場を現地と協力して建設し、またその余剰電力で太陽電池を拡大生産する。そして、電力を高温超伝導で世界中に長距離送電する技術開発も行うという。グローバルエネルギー新体系構築の鍵であり、日本の先進技術が貢献できるという。今までの日本の国際貢献とは一味違い、モノを売るのではなく、地元との国際協力体制の下、アフリカ地域の先端技術者の人材育成までも視野に入れた全く新しい国際プロジェクトである。

太陽電池の主要素材はSiであるが、この素材は高純度化してから利用するので、コストが非常に高くなってしまう。サハラ砂漠の地の利という意味では、砂漠の砂もSiを多く含んでいるので、そこからの低コストの抽出プロセスの開発も期待される。実は５年前までは、太陽電池の生産量は、日本が世界一位で、その主原料である高純度Siの生産でも大きな割合を占めていた。しかし、太陽電池需要の急増に対する国策を誤り、今は中国などの国に大きく差をつけられた状態となっている。

砂漠に大規模太陽光発電基地を作るには、解決しなければならない問題も多い。砂嵐や盗難の問題がよく言われるが、砂嵐の発生が余り問題にならない場所も十分ある。アフリカ社会の中で「太陽光発電」の国としての重要さに関する徹底した教育等も必要になるだろう。また、同様の事を他の国（例えば中国）が行った時に、コスト的に勝てるかどうかなど、産業としての競争力強化も今後行っていかなければならない。

講演の冒頭で鯉沼客員教授は、「太陽光発電は原子力発電を確実に超えることができます」と断言していた。ただ、条件付きで、50年後を想定していたが、太陽光発電の加速的進化を考えると、10年後にも達成できる状況が見え始めているようだ。今まで「サハラ砂漠はエネルギーの宝庫である」とは考えたことがない人も多いだろう、非常に新鮮で夢のあるお話だった。

色々な写真を用いて熱心な講義をする
物質系専攻の鯉沼秀臣客員教授

身近な太陽電池の話とあって、かなり具体的な
質問が多くなされ参加者は非常に満足していた

部局

大学院教育学研究科・教育学部

国際シンポジウム「震災被害への有効な心理支援に向けて―今、臨床心理学はどのような社会貢献ができるのか―」の開催

10月10日（月・祝）に本学救援・復興支援室の後援を受けて、震災被害に対する心理支援の国際シンポジウム（主催：一般社団法人　日本心理臨床学会）が安田講堂において開催された。当日は、安田講堂が満席になるほど盛況ぶりであった。

最初に教育学研究科の下山晴彦教授から、「震災から約７カ月が過ぎた今、心理支援のために何が必要なのかを明らかにする」という開催趣旨の説明があった。第１部では、南カリフォルニア大学のGerald Davison教授から「心的外傷体験に対して臨床心理学ができること」と題する基調講演があり、PTSDが現在のような形で取り上げられるようになった背景から、臨床心理士が災害後の介入にあたって留意すべき事柄に至る解説がなされた。第２部では、基調報告として、EUの危機支援プログラムEUTOPAの作成責任者であるケルン大学のRobert Bering准教授から、チェルノブイリの原発事故などへの対応経験も踏まえて災害時の危機介入における心理社会的支援の方法についての講演があった。次にロンドン大学のWilliam Yule名誉教授から子どもと若者がトラウマから回復するのを支援するための理論と方法についての講演があった。第３部では、日本における支援の現状と課題について、文部科学省初等中等教育局児童生徒課生徒指導室の郷治知道室長からスクールカウンセラーを中心とした学校における子どもの心理支援に関する報告があった。次に厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部 精神・障害保健課の福田祐典課長から、被災地における医療を中心とするメンタルヘルス支援に関する報告があった。最後に東日本大震災心理支援センターの村瀬嘉代子センター長より臨床心理士による支援の現状報告があった。その後、今後の有効な支援に向けて、講演者全員による活発な討論が行われた。

前列左よりDavison教授、Yule名誉教授、Bering准教授、後列左より郷治室長、福田課長、村瀬センター長、下山教授

部局

医科学研究所

国際学生フォーラム2011主催

10月11日（火）～13日（木）の３日間、医科学研究所の主催で国際学生フォーラム2011が開催された。本フォーラムは、医科学研究所、中国科学院、ネブラスカ大学メディカルセンター、グリフィス大学の４校が毎年持ち回りで主催しており、企画・運営等はすべて参加する博士課程大学院学生が中心となって行っている。また、合宿型のフォーラムというのも特徴の１つで、参加者は会場である国立オリンピック記念青少年総合センター（渋谷区代々木）に宿泊しながら、食事を共にし、セッション以外にも交流の機会を持つことができる。

会期中は天候に恵まれ、大変過ごしやすい秋晴れが続いた。11日夜に参加者全員の顔合わせを兼ねたオリエンテーションを行い、12日には清野宏所長による開会の挨拶後、２部屋に分かれてセッション、13日午前中にも引き続きセッションを行い、午後はエクスカーション、そして夜のレセプションパーティで幕を閉じた。エクスカーションでは上野の国立科学博物館と浅草を見学し、大変喜んで頂けた。また、医科学研究所附属病院の最上階にあるホールで行ったレセプションパーティでは、各校代表者による記念品交換を行い、また、屋上に出てライトアップされた東京タワーをバックに記念写真を撮り合うなど、大変なごやかなムードで本フォーラムを締めくくることができた。

参加した大学院学生の中には、今回初めて英語でプレゼンテーションをしたという方もいたようで、大変刺激的で貴重な経験となったようだ。フォーラムの企画・運営に携わるというのも貴重な体験だったと思う。学生の皆さんには、今回の経験を生かし、今後益々活躍していかれることを期待する。

国立オリンピック記念青少年総合センターにて

セッションの様子

部局

大学院農学生命科学研究科・農学部

西東京フィールド 防災訓練を実施

10月11日（火）13時28分から約２時間半にわたり、農学生命科学研究科附属生態調和農学機構を中心として防災訓練を実施した。旧農場地区と田無演習林地区を含む西東京フィールド全体から、生態調和農学機構、田無演習林及びアジア生物資源環境研究センターの教職員・学生、農場博物館ボランティアの合計71名が参加し、西東京消防署西原出張所の指導を受けて実施した。

今回は、３月に発生した東日本太平洋沖地震の際に、緊急地震速報の有効性と速報時における対処の在り方が重要と確認された事から、緊急地震速報による避難訓練を実施した。旧農場地区と田無演習林地区は隣接しているが敷地が広大なため田無演習林地区が先行して実施した。先ず、13時28分、田無演習林地区において、気象庁のＨＰからダウンロードした訓練キットがＰＣ上で再生された。13時30分に想定された地震発生直前に緊急地震速報が発令され、机の下等に隠れ身を守った。揺れがおさまった後、集合場所の演習林事務室裏口に避難し人員確認を行った。旧農場地区では、13時58分、訓練キットを館内放送で流し中庭への避難訓練を行った。ここでは、館内放送で音が出ないアクシデントがあったり、中庭で人員確認の際に取りまとめ部署がはっきりしなかったりする等の反省点があった。

その後、中庭において、消防署からの詳細な説明の後、粉末消火器を実際に使用した消火訓練を行った。オイルパンの中で燃え上がる炎を瞬く間に消火できる消火器から広がる粉末の多さに感嘆するとともに、取り扱いを知ることの大切さを実感した。

次に、自動体外式除細動器（ＡＥＤ）の使用を中心とした救急救命講習を受けた。心臓マッサージや人工呼吸の方法、またＡＥＤの使用方法等をわかりやすく実演していただき、迅速な措置が命を救うことを学ぶことができた。

最後に、西東京消防署より講評をいただき、小林和彦機構長から本日の訓練参加者への謝意が述べられ、西東京フィールド内の教職員・学生・ボランティアのほとんどが参加した防災訓練は無事終了した。

人員確認の様子（田無演習林地区）

粉末消火器を使っての消火訓練

マネキンを相手に救急救命講習を体験する

部局

大学院教育学研究科・教育学部
留学生修学旅行で日本の秋を満喫

大学院教育学研究科・教育学部では、10月12日（水）に恒例の秋の留学生修学旅行を実施した。今年度は日帰り旅行で、参加者は留学生15名、日本人学生チューター１名、市川伸一研究科長をはじめとする引率の教職員10名の計26名であった。

朝８時に貸し切りバスで本郷キャンパスを出発し、最初の目的地である埼玉県小松沢レジャー農園へ向かった。本郷キャンパス出発時には少々曇り気味であったが、道中から清々しい青空に恵まれ、絶好の旅行日和となった。目的地までの車中では、李正連准教授（国際交流委員会委員）の司会で、恒吉僚子教授（国際交流委員会委員長）、市川研究科長、多賀厳太郎教授（国際交流委員会委員）、佐藤学教授による挨拶に続き、参加者全員が挨拶・自己紹介を行った。今年初めて留学生修学旅行に参加した学生も、久しぶりに参加する学生も、皆一同にこの旅行への期待に満ちた様子でそれぞれの想いを語った。

10時頃に小松沢レジャー農園に到着。都内から２時間、自然に囲まれた農園の入り口で、飼育されている鶏とヤギの出迎えを受けた後、早速ぶどう狩りを始めた。ハサミ、バケツを手に数人ずつ分かれて食べごろの大きなぶどうの房を探すべく、太陽の光を一杯に浴びたぶどう畑に散った。早朝からのバス移動の疲れは全く無いようで、学生達は大きく実ったぶどうやお互いの写真を撮ったりしてのびのびとした様子で楽しんでいた。すぐに一房を決めてもいで食べる者もいれば、色々見比べて自分の気に入ったぶどうを探す者もいた。園内には緑、紫、赤紫に良く色づいた数種類のぶどうが実り、中には市場に出ることのない貴重な品種もあるということで、食べ比べる楽しみも味わうことができた。

ぶどう狩りを楽しむ留学生

ぶどう狩りを楽しんだ後は、軽やかな足取りで園内を移動し、しいたけ狩りを楽しんだ。採ったしいたけはすぐ昼食の山然焼（さんぜんやき）バーベキューで味わうことができるため、こちらも思い思いに吟味しながら、袋に採っては重さを計り、互いのしいたけを評しながら重さ一杯になるまで楽しんだ。

秋の味覚狩りを満喫したところでお腹も空き、待ちかねた山然焼バーベキューの時間となった。溶岩をカットした天然の石板で焼いた肉や野菜を、美味しい空気と皆で一緒に味わう幸せが一層美味しく感じさせ、ぶどう棚の下の長机に教職員、学生全員が皆仲良く並んで座り、一緒に語り、味わい、交流が進んだ。

小松沢レジャー農園にて記念撮影

午後は、小川町の久保昌太郎和紙工房での紙すき体験と、川越市内の散策を楽しんだ。紙すき体験では、原料の楮（こうぞ）から和紙ができるまでの工程を見学し、実際に紙すきの行程を体験した。参加学生は皆アジア地域出身ではあるものの、日本の和紙について実際に目の前で見る体験は初めてと見え、熟練した職人技に見入り、興味深そうに紹介を受けていた。紙すき体験では、皆真剣な面持ちで、丁寧に水槽の中で桁を揺すり、紙床に自分の紙を積んだ。すいた紙の上にあらかじめ選んだ花や葉の形をした色鮮やかな和紙を散りばめては、皆満足そうな表情で自分だけの和紙を愛でた。川越市内の散策では、夕暮れの中、美しい蔵造りの町並みが残る通りを思い思いに散策し、日本の歴史と伝統に触れた。

初めての紙すき体験

19時前にバスで本郷キャンパスに到着し、無事解散となった。普段の大学生活では経験できない貴重な体験を通じ日本文化に触れると共に、学生同士、また、教職員とも交流を深めることができ、大変有意義な留学生修学旅行であった。

部局

大学院情報学環・学際情報学府

現代韓国研究センター駒場支所の開設

10月12日（水）18時から、駒場キャンパスアドミニストレーション棟学術交流ホールで大学院情報学環附属現代韓国研究センター駒場支所の開所記念の講演会およびシンポジウムが、約50名の参加者を得て開催された。姜尚中センター長による「現代韓国研究センターのねらいと駒場支所に対する期待」という講演に引き続き、木宮正史（大学院情報学環、副センター長兼駒場支所長）、生越直樹（言語・朝鮮語）、岩本通弥（超域・歴史）、月脚達彦（言語・朝鮮語）、外村大（地域・歴史）、三ツ井崇（言語・朝鮮語）、朴祥美（パクサンミ、PEAK）の計７名による「駒場における韓国朝鮮研究：現状とその可能性」というシンポジウムが開催された。

駒場支所は、駒場と本郷の現代韓国研究を連携させることを目的として、９号館314Aに７月に開設された。シンポジウムでは、駒場キャンパスにいる現代韓国に関連した多彩な分野の研究者が一同に会して、今後、駒場支所を中心として計画される現代韓国と関わる研究教育に関する取り組みについて議論した。その中で、生越氏は、前期課程の学生のうち、韓国朝鮮語を履修する学生の比率が特に他大学と比較すると高くないという事実に注目し、それはなぜなのかを説明するいくつかの仮説を提示し検証を加えた。また、朴祥美氏は、日本における現代韓国研究をもっとグローバルに発信していくことが必要ではないかという重要な問題を提起した。

今後、駒場支所では次のような研究教育両面にわたる事業を計画している。第一に、広い意味で韓国現代史に関わる研究プロジェクトを立ち上げ、それと関連した資料を収集し、研究会や国際シンポジウムを組織化する。第二に、教育面への還元である。

現代韓国研究センター駒場支所の活動については、センターホームページ（http://ut-ccks.net/）にアクセスするか、駒場支所のメールアドレス（cckskmb@gmail.com）までお問い合わせください。

開所記念シンポジウム：駒場の韓国研究者７人

部局

医科学研究所

医科学研究所慰霊祭を挙行

医科学研究所では、同附属病院で亡くなられ、病理解剖させていただいた方々の御霊をお慰めするために、10月13日（木）13時30分から医科学研究所慰霊祭を挙行した。式は、参列者全員による黙祷に始まり、献体者御尊名の奉読の後、清野宏所長が「御霊に捧げることば」を述べた。続いて、御遺族及び医科学研究所関係教職員が献花を行い、最後に、今井浩三病院長からご遺族に対して感謝のことばがあり、14時過ぎに滞りなく終了した。

「御霊に捧げることば」を述べる清野所長

ご遺族への感謝のことばを述べる今井病院長

部局

低温センター

平成23年度浅野地区合同防災訓練の実施

10月14日（金）13時30分から15時30分にわたり、浅野地区において、本郷消防署と文京区の協力の下、防災訓練が行われた。低温センター、情報基盤センター、アイソトープ総合センター、理学部３号館、工学部（９号館、10号館、12号館、武田先端知ビル）、文学部アネックスの教職員・学生が約150名参加した。

初めに、各建物からの避難訓練を行った。低温センターでは１階供給室から火災が発生したという想定で、初期消火に係る火災報知器の発報や消防署への通報、近隣の各部局への通報等を行った後、学生等を誘導し、建物内に逃げ遅れた者がいないかを確認しながら集合場所に避難した。避難後に人員確認を行い自衛消防隊長に報告をした。

続いて、体験訓練として起震車による震度体験を行った。また煙ハウスでは火災のシミュレーションを行った。情報基盤センターの１階では救急救命講習会が開かれ、AEDの使い方などを行った。また水消火器を使用しての消火訓練を行い、実際に屋内消火栓ホースを使用しての訓練も行われた。

最後に本郷消防署から講評をいただき、浅野地区合同防災訓練は無事終了した。

避難完了（避難場所へ集合）

消火器の訓練（女性も積極的に参加）

AEDの訓練（消防署によるAEDの操作説明及び訓練）

部局

大学院人文社会系研究科・文学部

第１回東京大学文学部公開講座を開催

大学院人文社会系研究科・文学部では、10月15日（土）の14時から本郷キャンパス法文２号館において第１回東京大学文学部公開講座を開催した。記念すべき第１回目は「引用と変奏―日本美術史の作り方」と題し、講師は本研究科基礎文化研究専攻の佐藤康宏教授（美術史学）が務めた。

佐藤健二副研究科長による司会のもと、冒頭に中地義和人文社会系研究科長から開会の挨拶があり、本講座の開催経緯と期待について話があった。

本郷キャンパスでの文学部公開講座開催は初となるが、北海道北見市では平成12年より公開講座を開催しており、今年６月に第15回目を迎えている。東京大学考古学研究室による常呂遺跡の発掘調査が昭和32年に開始されたことを契機に、北見市（旧常呂町）には大学院人文社会系研究科の附属実習施設として北海文化研究常呂実習施設が置かれた。半世紀におよぶその関わりの中から、旧常呂町における出前講座を開催してきた。今回は、社会連携をより一層深めることを目的に、これまで北見市で行ってきた公開講座をより多くの方に参加いただける

よう本郷キャンパスにおいても開催する運びとなった。

佐藤教授による講義は、南沙織の『17才』を歌うという刺激的なパフォーマンスにより、参加者の関心を一気に引き込んではじまった。その後はスライドを用いながら、数々の美術作品が過去の作品を引用し、既存のモチーフやテーマが引き継がれていく様を丁寧に説明された。新しい視点から語られるこの日本美術史講義は、聴衆から好評をいただき、アンケートにも次回以降の公開講座への期待が寄せられた。

次回の第２回文学部公開講座は、平成24年５月12日（土）に、本研究科基礎文化研究専攻の設樂博巳教授（考古学）を講師に、「縄文人と動物たち」と題して開催される。なお、北見市での公開講座は平成24年夏の予定である。

中地義和人文社会系研究科長による開催挨拶

熱心に日本美術の歴史について講義する佐藤康宏教授

部局

史料編纂所

倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会を開催

10月18日（火）、史料編纂所では、中国国家博物館（北京市）から陳履生副館長らを招聘し、倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会を開催した。この研究集会は、「日本史史料の研究資源化に関する研究拠点」の共同研究として、画像史料解析センターとの共催で行われた。

会場風景

日本側からは、史料編纂所が所蔵する「倭寇図巻」と国家博物館所蔵の「抗倭図巻」を赤外線撮影した結果、共通に「弘治」という日本年号が記されていた謎の解明に取り組んだという報告がされた。

まず報告に立った須田牧子助教（史料編纂所）は、史料編纂所が所蔵する「蒋洲咨文」を取り上げた。報告によれば、倭寇に手を焼いた明は1556（弘治２）年11月、日本へ使節（蒋洲）を送り、倭寇の首魁・王直に対して海外貿易を解禁すると説得して帰国を承諾させ、さらに豊後の大友宗麟へ倭寇禁圧を要請した。このとき対馬宗氏へ出したものが現存する「蒋洲咨文」であるという。その後、蒋洲は周防の大内義長（宗麟の実弟）へも使者を出し、大内は大友氏の使者に書状を託し、1557年、明使は大友船とともに王直を連れて中国舟山に到着した。しかし王直は捕縛され1559年に斬首されてしまう。

第２報告の鹿毛敏夫准教授（新居浜高専）は、舟山に着いた大友船が勘合船とみなされず、明軍から攻撃されて炎上したこと、しかし彼らが地元の協力を得て船団を再建し、帰国せずに、中国の南方沿岸へ向かって交易を行おうとしたことを論じた。明側からみれば大友船団は官命に背いて密貿易を行う倭寇そのものであり、明側が見せられた書状の「弘治」の年号は倭寇襲来の年として強烈な印象を残したのではないかというのである。

東アジアを舞台にスケールの大きな両報告であった。

中国国家博物館陳履生副館長の報告

第３報告では国家博物館の陳履生副館長が、同館が所蔵する「太平抗倭図」について、さまざまな画像を用いて紹介した。同図は、太平県（現在の台州市温鈴）を襲撃する倭寇の一団とこれを石つぶてで撃退する民衆たち、かけつける明軍、城内での祈りの様子などを「輿地図」の手法で描いた民間画であり、県城が危機に陥ったところ関羽とその手勢が忽然と現れ、倭寇を退けたという。陳副館長は本図の要素を整理して巧みに示していった。とくに約１間四方の図に450人を超える人物が登場し、倭寇の掠奪や民衆による撃退の様子が細部に至るまで生き生きと描かれていることを指摘した。押し寄せる倭寇はみな日本刀と扇子（日本からの輸入品）を握り、これが倭寇を示すコードであったことも指摘された。ただし従来1552（明・嘉靖31）年５月の事件とされてきた点は保留し、今後の検証が必要だと締めくくった。

「太平抗倭図」の詳細が今回初めて明らかになり、90名を超える参加者から感嘆の声があがった。中国国家博物館との間での国際共同研究は２年目を迎えたが、次々と新しい史料が登場し、その成果が期待されている。

中国国家博物館所蔵「太平抗倭図」
（部分：日本刀と扇子を握る倭寇）

部局

大学院教育学研究科・教育学部
図書館団地総合防災訓練実施される

10月20日（木）14時から約１時間半にわたり、図書館団地（総合図書館、社会科学研究所、情報学環、史料編纂所、法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター、教育学部）における総合防災訓練が、今年度当番の教育学部の計画のもとに、本郷消防署並びに文京区役所の協力を得て実施された。また、今年は隣接の赤門総合研究棟（文学部、経済学部、社会科学研究所、教育学部）の訓練も併せて実施された。

当日は、総合訓練（参加者約210名）として、地震発生に伴い教育学部地下１階で火災が発生したとの想定で、消防署等への通報、図書館団地各部局の初期消火班が消火器を持って駆け付けると共に、各部局及び赤門総合研究棟の教職員・学生の避難誘導訓練を行った。

その後、部分訓練（参加者約100名）として、本郷消防署の指導による消火実技訓練及びAED（自動体外式除細動器）を使用した応急救護訓練、文京区役所の指導による「起震車」「煙体験ハウス」による地震・火災体験訓練を行ったが、体験を希望する参加者が長蛇の列を作るなど、例年になく訓練に対して真剣かつ積極的であり、東日本大震災を体験して、防火・防災の意義を再認識した訓練であったと、本郷消防署及び文京区役所の方々も感心していた。

最後に、本郷消防署から「地震の際は，ロッカー等倒壊の恐れのある危険物から離れて身を守るように」などのアドバイスと講評があった。そして避難訓練から参加した古田元夫附属図書館長（図書館団地共同防火・防災管理協議会代表）から挨拶、教育学部を代表して野崎大地教授から訓練協力に対するお礼の挨拶があり訓練は無事に終了した。

避難訓練の様子

AEDを使用した応急救護訓練

部局

先端科学技術研究センター

「DO-IT Japan」が博報賞を受賞！

このたび先端科学技術研究センターの中邑賢龍教授（人間支援工学）が主宰する、障害や病気を抱えた子どもたちのための大学・社会体験プログラム「DO-IT Japan」が博報賞（博報財団主催）を受賞した。博報賞は、教育現場を活性化させることを目的に、優れた教育活動を実践している個人や団体を顕彰する事業である。DO-IT Japanは、特別支援教育部門で特に優れた取り組みとして評価され、博報賞と併せて文部科学大臣奨励賞も受賞した。中邑教授は「DO-ITの子どもたちの社会へのアピールが認められた」と受賞の喜びを語った。

博報賞は1970年に始まり、今年で42回目。国内の大学教授など、10人の審査委員が選定する。今年は全国の学校や団体、個人の活動100件が候補としてあがり、18件が選ばれた（うち文部科学大臣奨励賞の同時受賞は５件）。表彰式は11月11日（金）に東京都内で開かれた。

DO-IT Japanは、障害や病気を抱えた子どもたちの大学進学や将来の就職など、夢の実現を支援するプログラム。2007年の開始以降、それぞれの子どもの障害にあった教育支援技術を提供したり、大学の模擬授業でさまざまな知識や能力を身につけてもらうことで、進学や就労を支援している。自分自身で考え、将来的に社会のリーダーとなる子どもの育成を目指している。

親元を離れて大学や企業で講義を受けたり、社会の中で活躍する障害がある人と交流するなどの特別プログラムには、これまでに延べ105人が参加。活動には先端研の教員や学生、日本マイクロソフト株式会社、富士通株式会社、ソフトバンクグループなどの企業も協力しており、Windows PCやiPadなどを使ったICT（情報コミュニケーション技術）教育を充実させるため、ソフトの共同開発などにも取り組んでいる。

10月22日（土）には安田講堂でDO-IT Japan秋季プログラム特別企画シンポジウム「障がいのある子どもの高校入試を考える」を開催し、障害のある児童・生徒やその保護者、学校関係者など約240人が参加した。中邑教授、先端研の巌淵守准教授（支援情報システム）、近藤武夫特任講師（人間支援工学分野）などがシンポジストとして登壇し、さまざまな障害のある子どもの教育現場の事例を紹介。障害のある子どもが授業でテクノロジーを上手に活用することで学力が向上したケースや、重度の読み障害（ディスレクシア）と診断された子どもが入学試験を受ける際、問題文読み上げなどの措置が認められなかった例などを通して、障害を抱える子どもたちの入試や教育現場での課題について議論した。

中邑教授は「こうした活動を通して多くの障害のある子どもたちの未来を切り開いていきたい」と今後の意気込みを語った。

DO-IT Japan 小学生プログラムで参加者がiPadを利用しながら授業に参加している様子（８月上旬）

高校生・高卒者プログラムで障害のある高校生・高卒者が大学の講義に参加している様子（８月上旬）

安田講堂で開かれたシンポジウムでは障害のある子どもたちの入試について考えた（10月22日）

部局

東洋文化研究所

第11回東京大学東洋文化研究所公開講座が開催される

10月22日（土）に、医学部教育研究棟鉄門記念講堂にて、第11回東京大学東洋文化研究所公開講座が開催された。本講座は東洋文化研究所が長年蓄えてきた知的ストックをもとにして研究所スタッフがわかりやすく解説するアジアを知るための公開講座で、2001年から年１回開催し今年で11回目である。今回は『アジアの覚』として、佐藤仁准教授による「資源保全への目覚めと日本近代」、馬場紀寿准教授による「沙門ゴータマの目覚め－古代インドと初期仏教－」の講演が行われ、177名にも及ぶ市民の出席を得、活発な質問・意見が寄せられた。

公開講座の様子

読者投稿写真

コーヒーの実

コメント：2月27日に東洋文化研究所7階の私の研究室で花が咲いたコーヒーの木に実がなりました。（8月2日撮影）

（撮影：　東洋文化研究所　池本幸生さん）

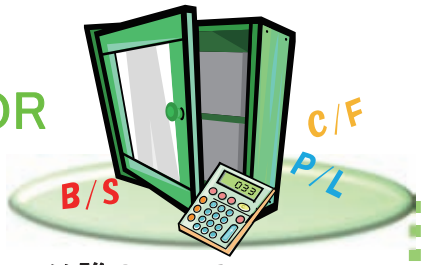
花壇の片隅で

コメント：マリーゴールド、ブルーサルビア、サルビア。
薬学部角の小さな花壇にて。

（撮影：　本部外部資金課　小林幸太郎さん）

決算のDOOR

～数字が語る東京大学



第14回　借りたモノは誰のモノ？

欲しいものを手にいれるには、お金を出して買うのが一般的。思いがけずタダで手にはいる機会もあるかもしれません。でも、高額すぎたり、一時的に必要なだけだったり、タダでくれる奇特な方が周りにいなかった場合、「お金を出して借りる」という方法も一案です。その場合の所有者はあくまで貸し手側。「そんなの当たり前」と笑うなかれ。実は会計の世界では借りているものでも、買ったものと同じように自分のものとみなす場合があります。

それが「リース取引」です。リース会社が企業や法人に代わり希望物件を購入し、長期間(１年以上)リース料と引き換えに貸し出すことで、ほんの一時利用するレンタカーやレンタルCDなどは対象外。さらに、リース期間中の途中解約は事実上禁止、毎月のリース料に本体価格以外の維持経費など諸費用も含まれることが前提条件になります。この場合、「リース取引」はあくまで支払い方法の一つにすぎず、使用方法も、利息が付く点も、ローンで買うのと経済的実体は全く変わりません。そのため、実態に合う情報開示が常に求められる会計では、法的所有権はなくても買った時と同じように、リース物件を資産勘定として計上し、管理します。とはいっても借りている事実は事実。そこでリース料総額を「リース債務」という負債勘定に計上し、毎年の支払額を減らしていくことで残額を明示しているのです。

情報基盤センター計算機室の超並列型スーパーコンピューター。952台分のコンピュータが整然と並んでいます

さて、東京大学のリース資産は現在74件。実験設備や医療設備などリース資産の総額は約264億円。年間のリース料は71億円になります。中でも情報基盤センターのスーパーコンピューター(スパコン)はその代表格。目に見えない空気や電子、小さすぎて観察できない原子や素粒子、見たくても見えない地球の構造など、実世界では可視化できない現象をコンピュータ上で再現するスパコンは膨大で複雑かつ困難な計算を高速に処理するため、設備も価格もとにかくスーパー！そのためリースにすることで一度に多額の資金がなくても取得でき、メンテナンス費用もリース料金に含まれるので安心して24時時間365日利用できます。しかもリース終了後の撤去費用はリース会社もち。至れりつくせりです。

10月から新しく仲間入りした大規模SMP並列スーパーコンピューター。幾何学模様の外観がとってもお洒落♡

理論、実験に続く第3のツールとして、学内だけでなく他大学、他機関、民間企業にも広く利用されている東京大学「**の**」スパコン。地球環境、医療、あらゆる科学技術の研究開発の基礎基盤として、どんな未来を私たちに見せてくれるのかとても楽しみですね。（青）

本部財務部決算課　（内線22126）
E-mail: kessanka@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
◆このコラムは一見複雑な国立大学法人会計をわかりやすくご紹介することを目的とし、文章の読みやすさを重視しているため、ある程度恣意的な表現を取る場合があります。あらかじめご了承ください。
—ご意見、ご質問お待ちしております！

インタープリターズ・バイブル vol. 52

科学技術インタープリター養成プログラム

コミュニケーションの効果は測定できるか？

佐倉 統
大学院情報学環　教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

科学技術コミュニケーションの効果は上がっているのか？影響を測定しなければいけない！——最近は科学コミュニケーションの関係者が集まると、二言目にはこの話題になる。日本だけのことではない。PCST(Public Communication of Science and Technology)など、科学コミュニケーションの国際会議でも事態は同様だ。誰が評価するのか？　適切な評価尺度は？　定性的な側面はどうする？……などなど。

さまざまなところから助成資金をいただいて運営しているプロジェクトなのだから、スポンサーにきちんと成果を報告するのは当然のことだ。だが、評価する側とされる側とで「成果」についてのイメージが共有できていないと、評価は徒労に終わる。あるいは相互不信を残しかねない。

そもそもコミュニケーションの成果とは何だろうか。日常の生活場面でのコミュニケーションで考えてみよう。対人関係であれ組織間であれ、コミュニケーションが順調にいっているときは、ほとんど意識にのぼらない。不全になってはじめて気づく。コミュニケーションとは、「健康」のようなものだ。科学技術コミュニケーションも同じだろう。理科離れ、科学離れ、あるいは原発事故などがあって、はじめてその重要性が認識されることになる。

だから、科学技術コミュニケーションの「成果」をはかるのは難しい。ジョギングや水泳や健全な食事をして健康状態が保たれていることが実感できたとしても、個々の運動や食事の個別の効果は、なかなか測定できない。

個人的には、コミュニケーションの「成功」とは、そこにいる人々が心地よく、活き活きとした気分になることだと思っている。親しい友人との知的で気の置けない会話。愛する人との言葉は少ないが心休まる会話。授業中の一言で、眠そうだった学生たちの目がパッと輝いたとき。いずれも、その「効果」を測定するのは難しい。心拍数や筋電位やアドレナリン量などを測定すればできるかもしれないが、科学カフェの参加者からそんなデータを取るのは現実的ではない。

名案はない。とりあえずの提言は、以下の二つである。プロジェクトの事前に、評価者側と評価尺度についての共通見解をある程度共有しておくこと。コミュニケーションの成功は、参加者の笑顔の数であるとコミュニケーターは心得ること。その先は、また次の課題である。

★科学技術インタープリター養成プログラム
http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/

Crossroad ～産学連携本部だより～ Vol. 72
Crossroadとは、産業界と大学がクロスする場所の意味をこめます

本学の学生を対象に、起業・事業化を支援する「東京大学アントレプレナー道場」。「大学・学生が世界を変える！」をキャッチフレーズに、自分のアイデアをもとに、どのようにしたら起業できるのか、自分の研究成果である発明等の知的財産を、どうやって事業（ビジネス）に結びつけることができるのかといった、起業・事業化のノウハウを学んでいきます。今年で第7期目を迎えた本道場。最終舞台ともいえる、最終発表・審査会をご紹介します。

大学・学生が世界を変える！

第7期「東京大学アントレプレナー道場」の最終発表・審査会が10月15日、福武ラーニングシアターで開催されました。4月の初級コースから始まった本道場。中級コースを経て、上級コースへと進んだ5チームが、起業・事業化プランを策定し、実際に社会に問うプロセスへと進みました。9月17・18日には、千葉・検見川セミナーハウスで“強化合宿”を実施。メンターからの厳しい指摘やアドバイスに、若干名の脱落者が出るというハプニングはあったものの、ビジネスプラン改善のヒントを得るなど、道場生に一層磨きがかかりました。

アントレプレナー道場のプログラムを終え、充実感と達成感から自然と笑顔に。
自分自身への自信にもつながる結果となりました

そして迎えた、最終発表・審査会。上級コースに進んだ5チームがビジネスプランを持ち寄り、メンターから受けた特訓の成果を活かした**プレゼンテーション**を披露。審査員に保立和夫産学連携本部長、郷治友孝㈱東京大学エッジキャピタル社長、山本貴史㈱東京大学TLO社長を迎え、プロの視点からのシビアな質問にもしっかりと返答するまでに成長しました。

講評の中で、保立産学連携本部長は、「大変素晴らしいプレゼンテーションをしてくださったみなさまのご努力に感銘しました。正直申し上げて、鑑定には大分、苦労し、さまざまな角度から議論を重ねて選びました。これで一区切りつきましたが、これまでのものをさらに発展し、次のステップに向かって、また大いに努力されますことを期待し、お祈りしています」とあいさつ。道場生の質の高いプレゼンテーションを高く評価されていました。

厳正なる審査の結果、**最優秀賞**には、「クラウドを用いたX線CT画像提供」（qBRANEチーム）、**優秀賞**には、「映画ファンをつなぐ共有サイト提供」（Link Senceチーム）と、「オイルパーム廃棄古木から2種類のバイオ燃料の大量生産」（Agri Energy Unityチーム）が選ばれました。入賞チームは北京大学へ渡り、北京大生を前に、英語でプレゼンテーションを行いました。 ＜下記に詳細＞

最優秀賞

クラウドを用いたX線CT画像提供サービス qBRANE

代表：水谷治央（新領域創成科学研究科情報生命科学専攻／ポスドク）

優秀賞

映画ファンをつなぐ共有サイト提供 Link Sence

代表：長尾俊（情報理工学系研究科電子情報学専攻／修士1年）

優秀賞

オイルパーム廃棄古木から2種類のバイオ燃料を大量生産 Agri Energy Unity

代表：谷本征樹（農学生命科学研究科農学国際専攻／修士2年）

次点：表現者ポータルサイト「Re:Quest.com」＜Begin a quest.＞ 代表：堤健昭（新領域メディア環境／M1）
：PRIVATE AMBASSADOR サイトの運営 ＜日の丸＞ 代表：日野祥智（先端研／D1）

ビジネスプラン交流 at 北京大学

ビジネスプラン最終発表・審査会の本学選抜チームと、北京大学との「ビジネスプラン交流」が、11月2～6日にかけて、中国の北京大学で行われました。自らの事業化の提案を国際的な視点から捉え、ビジネスプランのレベルアップを図ろうと、2008年からスタートした「東京大学アントレプレナー道場」のプログラムの一環です。

本学からは、最終発表・審査会の選抜チーム11名と産学連携本部スタッフ5名が訪問しました。北京大学主催の歓迎会では、北京大学校長助理の马化祥教授と、本学から保立産学連携本部長がそれぞれあいさつされ、学生起業家教育を通じて、日中ひいては世界のイノベーションに寄与する人材の育成を促進する重要性について意見が交換されました。その後、両大学からそれぞれ3チームがビジネスプランを英語で発表。本学選抜チームの発表は、中国で有名なITインキュベーション施設である“Innovation Works”で行われ、学生間で質疑応答が交わされるとともに、Innovation Works の責任者から、プロの視点のコメントをいただきました。翌日は、中国発世界第2位の検索エンジンを運営する Baidu, Inc.を訪問し、社内見学のあと、Baidu, Inc.の国際事業担当者とディスカッション。また、北京大学の学生の案内で、北京市内の視察を行うなど、よりグローバルな視点を養う体験をすることができました。

北京大学歓迎式典会場前で記念撮影

今回の訪問を受けて、2012年2月（予定）には、北京大学の学生が本学を訪れ、さらにバージョンアップされたビジネスプランを持ち寄り、交流が図られる予定になっています。

連絡先：産学連携本部（本部産学連携課）
電　話：内線22857（外線03-5841-2857）
WEBサイト：http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/

DUCR 検索

このページでは、政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心に、そのときどきのホットニュースをお届けします。

シンポジウム：医療イノベーションと諸制度

新しい医療技術を臨床現場に届けるために

10 月 13 日に政策ビジョン研究センターは、ワシントン大学医学部長、ラリー・J・シャピーロ教授（Larry J. Shapiro）を迎えました。

「個別化医療の制度の在り方の議論を」（ラリー・J・シャピーロ教授）

シャピーロ教授は、遺伝学、分子生物学、生化学の研究者として著名な方で、現在は、医学部長兼ワシントン大学側の東大親善大使を務めておられます。2度目の本学訪問となる今回は、当センターが公共政策大学院と共催をするシンポジウム『医療イノベーションと医療に関わる諸制度を考える』にご登壇いただきました。

今回のシンポジウムのテーマは、今日の日本の社会に医療のイノベーションをどのように組み入れていくかというもので、欧米や我が国の最先端の研究者や各界の識者の方々に議論していただきました。このシンポジウムは、基調講演と2つのパネルディスカッションから構成されています。

第1部の基調講演では、まず八山幸司氏（内閣官房医療イノベーション推進室企画官）が、我が国において今後医療イノベーションをどのように推進してゆくのかについて、現状をご報告されました。また、ハイメ・カロ氏（ユナイテッド・バイオ・ソース社 シニアバイスプレジデント）からは、欧州諸国で採用されているヘルステクノロジーアセスメントについてご報告があり、医療上の価値の評価をめぐってドイツや英国で行われている取り組みについて紹介がありました。そこでは、評価が実は極めて難しく、社会的な議論の中で進められていることが指摘されました。

米国では医療に対して GDP ベースでは日本の倍のコストを費やしています。シャピーロ教授は、「米国における個別化医療と予防医療」と題するスピーチの中で、遺伝子、バクテリアなどが疾病に与える影響の解明が可能となったことに加えて、患者個人にとってより適切で効率的な治療法の選択が可能となったこと、それによる治療費の削減可能性について具体的な実例を挙げて説明されました。一方で、規制当局の対応が遅れていて、個別化医療を幅広く効率良く臨床現場に届けられていないという米国の現実も浮き彫りにされました。さらに、規制の複雑さ、費用便益分析、遺伝子の情報に関する差別、倫理、個人情報保護など複雑な問題が複合的に絡み合うため、個別化医療については技術的な研究を進めるとともに、制度の在り方についても今後様々な分野から深い議論が進められていくべき事項であるとの問題提起がされました。

第2部では、「医療イノベーションの現状と未来への期待」と題して、医療イノベーションを取り巻く環境と将来的な課題が議論されました。本学からは、理事（副学長）の松本洋一郎教授と政策ビジョンセンター長の城山英明教授がパネルディスカッションに加わり、安全規制や価格規制のあり方を議論するのはもちろんのこと、医療の情報化をさらに推進して、より早くより安全で有効な医療技術を臨床現場に届けるために医療上の価値を評価する仕組みの重要性などが共有されました。

第3部では、「医療イノベーションの促進と社会基盤の整備」と題して、将来的な方向性について議論されました。本学からは、林良造客員教授（公共政策大学院）、杉本和幸客員教授（公共政策大学院）、児玉安司客員教授（法学部・医学部）がパネルディスカッションに加わり、高齢化が進展する中での医療財源のあり方、医療資源の有効活用と医療提供体制の効率化、安全や価格面についてのより合理的な規制の模索など、医療制度のあらゆる面から医療イノベーションの実現に向けて取り組むべき方向が示されました。

当センターでは、新しい技術が社会に与える影響について様々な分野横断で研究を行っており、医療分野における新しい技術についても今後関係各位と意見交換を進め研究を進めて参りたいと存じます。

シンポジウム

医療イノベーションと医療に関わる諸制度を考える

日時：2011 年 10 月 13 日（木）
場所：本郷キャンパス　法文 1 号館 2 階 25 番教室
主催：公共政策大学院
共催：政策ビジョン研究センター／ワシントン大学
定員：400 名

バリュー・ベイスド・プライシング

医療上の価値を評価する仕組み

政策ビジョン研究センター特任助教　佐藤 智晶

我が国では医療イノベーション実現のために、診療報酬・薬価などにおいて費用対効果の観点を導入することや、イノベーション成果を適切に評価することが、大きな課題となっている。他方、海外でも医薬品に関して、最も有効かつ革新的で、しかも必要とされる新薬により高い薬価をつけようという試みが今まさに進められようとしている。それが、バリュー・ベイスド・プライシング（Value Based Pricing, VBP）という制度である。

バリュー・ベイスド・プライシングという考え方は、根本的に新しいものではないのかもしれないが、世界的にみてもこれまで全面的な導入に成功した国はない。特に医療機器を含む医療技術についてはいえば、議論ははじまったばかりである。医薬品については英国で議論が先行しているものの、医療イノベーションを推進しようとする我が国では、短期的には現行制度のもとで、中長期的には諸外国の制度に照らして、何らかのバリュー・ベイスド・プライシングを検討してゆくことになるだろう。その際には、医薬品と医療機器との間の違いのように、個別の医療関連製品の特性に鑑みることはもちろんのこと、そもそも何を医療上の価値（イノベーション）とするのか、イノベーションの計り方やそこで用いられるエビデンスとはどんなものか、そしてどうやってイノベーションの促進にインセンティヴをつけてゆくのかを議論することが避けられない。医療の質を高めつつ医療費の増大を抑えるような、より費用対効果の高い医療を実現する診療報酬・薬価制度を模索するために、今後さまざまな試行錯誤が期待される。

http://pari.u-tokyo.ac.jp/policy/PI11_04_value_based.html
全文は当センターウェブサイトの Policy Issues をご覧ください。

Asian Diversity No.13
by ASNET

ASNET活動紹介
2011年度夏学期総合科目
「日本・アジア学概論」

東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET）では大学院生向け研究科横断型教育プログラム「日本・アジア学」を開講しています。この学際的教育を学部生向けにも行ってみよう、という初めての試みが、2011年度夏学期総合科目（国際・地域一般）「日本・アジア学概論：国際社会で活躍する基盤を身に付ける」の開講という形で実現しました。

開講の目的は、大学に入学したばかりの若い学生達に、アジアに存在する様々な問題－工業化による環境汚染、国際公共事業をめぐる争議、交通渋滞と都市開発、資源開発と環境保全－について、自ら主体となって考える機会を提供する、ということでした。

まず、「日本・アジア学」を学ぶ意義について概括的な講義が行われた後、タイ、インドネシア、ベトナム、中国の4カ国に分け、各国3回ずつ授業が行われました。各国の授業では、理系の教員によるケース・メソッド方式の授業を通じて、アジアの社会が抱える様々な問題を考察した後、「なぜ、そのような問題が発生するのか？」という学生達の関心を、文系の教員がその国の歴史、社会、文化的背景から解き明かしていきました。

受講にあたっては、事前に課題文の予習が義務付けられるなど、受講生にとっては少々ハードだったかもしれません。しかし約20名の受講生達は、毎回しっかり予習をこなし、積極的にグループ・ディスカッションとプレゼンテーションに参加していました。アジアに存在する様々な問題について多角的に学び、その中から将来の専攻を発見するための、貴重な機会となったことでしょう。本講義は来年度も開講します。やる気あふれる、多くの学生さんの受講をお待ちしています。

丸川知雄教授（社会科学研究所）による最終講義
「中国天津の工業発展史」の様子（2011年7月12日）

文・写真：安田佳代

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET機構）は、アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURLをご確認下さい。：

http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/

ASNET機構　検索

Relay Column

ワタシのオシゴト／第69回

Rings around the UT

本部渉外・基金課
谷本 知嘉子さん

寄附者と東大の架け橋となるために

杉山副理事の席をお借りして撮影しました！

主に、東京大学基金の獲得に関する業務を行っています。同期や学内の知人には、「いわゆる営業みたいなことをやっているのか？」と聞かれることがあります。実際のところ、初対面の方に名刺を出して、「東京大学基金への寄附をお願いします」と言いますが、基本的に相手は、東大で青春を過ごし、社会で活躍されている卒業生なので、母校の現状を知りたいという方や、ご自身の大学時代の思い出をお話される方も多く、清々しい気分になったりほっこりすることもよくあります。

こういった時勢の中、寄附をして下さる方々は、「東京大学の教育・研究の発展と共に、日本がより良くなって欲しい」という信念を持っていらっしゃる方が多いので、寄附者の想いが東大の発展に寄与できるよう、架け橋となることが少しでもできればと思う毎日です。

3歳の息子と同世代の子を持つパパや先輩ママも
多く、理解ある有難き渉外本部の方々と

得意ワザ：蚊が自分の皮膚を刺す瞬間がわかる
（最近体得した）
自分の性格：思慮深さに欠ける、
よく言えば、素直ということで。
次回執筆者のご指名：丹羽悠二さん
次回執筆者との関係：研修で知り合い、
業務の情報交換をしています。
次回執筆者の紹介：東大の森への情熱と
お子様への愛情が半端ない人。

コミュニケーションセンターだより No.82

■イベント出店報告！　柏キャンパス一般公開

10月21日、22日の2日間、柏キャンパス一般公開に出店してきました！2日目の土曜日はあいにくのお天気でしたが、小雨が降るなか、沢山の方にお越し頂きとても嬉しく思いました！
人気商品は「体力式アミノ酸」（新領域創成科学研究科）でした！

UTCCをご存知ではない一般の方にも研究成果のストーリーをお話し、大変興味を持って頂きました。
ご家族連れも多く、お子様にはステーショナリー、特にシャープペンシルが人気でした。
柏キャンパス職員、学生の方も多くご来店下さり、沢山お話できました。ありがとうございました！！

柏一般公開出店の様子

■イベント出店報告！　ホームカミングデイ

10月29日のホームカミングデイは銀杏並木に出店してきました！今回初めてお出しした御酒の水割りが大変好評で、沢山の卒業生の方に御酒の美味しさを楽しんで頂きました。

次回のコミュニケーションセンターだよりでは、駒場祭出店の報告をさせて頂きます！お楽しみに★

ホームカミングデー
銀杏並木出店の様子

■スタッフお薦め商品★

人文社会系研究科
修士1年
福永新一

こんにちは！
UTCC学生スタッフの福永です。
今回僕がお薦めする商品は「御酒」です。
戦後50年以上の歳月を経て復活した、沖縄の「幻の泡盛」です。
強いお酒が苦手！というお客様にも大変大好評で、その秘密は「香り」にあります。とてもフルーティーな香りで、女性の方にもとても人気です。
このしっかりとした香りは、水割りやお湯割りにしても飛ばず、美味しく飲んでいただけます。
少しずつ寒くなってくるこの時期に「御酒」のお湯割りはいかがですか？

右：「御酒陶器ボトル」 ¥4,200（税込み）
左：「御酒ミニボトル」 ¥1,995（税込み）

担当：UTCC三浦

東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center
OPEN：月曜～土曜 10：00～18：00
電話：03-5841-1039
http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp

～救援・復興支援室より～ No.6

■救援・復興支援室の活動（10月～11月）

- 10月　7日・・・第3回ボランティア活動報告会
- 10月20日・・・登録プロジェクト更新（新規1件）
- 10月31日・・・第6回救援・復興支援室会議
- 11月28日・・・第7回救援・復興支援室会議

プロジェクト登録件数
81件
2011年10月20日現在

■救援・復興支援室の活動の詳細はウェブサイトをご覧ください。
http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/index_j.html

■救援・復興支援室
Email：kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
内線：21750

平成23年度 学内広報 発行スケジュール

号数	原稿〆切	発行日（校了）	配布
1421	1月　5日（木）	1月　25日（水）	1月　31日（火）
1422	1月　31日（火）	2月　23日（木）	2月　29日（水）
1423	2月　29日（水）	3月　26日（月）	3月　30日（金）

都合により変更になる可能性がありますので最新のスケジュールは下記URLよりご確認ください。

ご寄稿の際は、以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。
http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_ j.html

問い合わせ先・原稿提出先
本部広報課　広報企画チーム
TEL：03-3811-3393　内線 82032
E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

INFORMATION

シンポジウム・講演会

シンポジウム・講演会

生産技術研究所

HPCI戦略プログラム分野4：次世代ものづくり 第2回シンポジウム開催

今回のシンポジウムでは、次世代ものづくり分野で掲げる先導的研究課題の実像とそれらの成果を広範の産業界に普及する仕組みについてご紹介し、今後の研究開発に対する利活用面からのご助言・ご提言を得ることを大きな目的としています。

本年６月、国産スパコン“京”が世界一の座を奪還して以来、広範の基礎科学の発展はもとより、その応用としての「ものづくり」に対しては目に見える画期的成果創生へ大きな期待がかかることになりました。特にこの３月に発生した東日本大震災による甚大な被害の克服・復興が喫緊の国家的課題になっている現在、ものづくりの復権・更なる発展への取り組みは極めて重要な施策になっています。ものづくりは広範にわたる分野の技術が融合されるプロセスであり、正に学際的科学である計算科学の貢献は益々重要な位置を占めることになるものと思われます。

皆様のご参加をお待ちしております。

開催日時：12月９日（金）10：30～17：30
会場：（独）理化学研究所
　　計算科学研究機構　セミナー室
　　神戸市中央区港島南町7-1-26
アクセス：http://www.aics.riken.jp/Access.html
主催：生産技術研究所、日本原子力研究開発機構、
　　宇宙航空研究開発機構
後援（予定）：（独）理化学研究所、（独）海洋研究開発機構、
　　（財）計算科学振興財団、スーパーコンピューティング技術産業応用協議会
協賛：学会（21機関予定）
参加費：無料
URL：
http://www.ciss.iis.u-tokyo.ac.jp/supercomputer/

シンポジウム・講演会

環境安全研究センター

第21回環境安全研究センターシンポジウム「資源・材料とサステイナビリティ」

環境安全研究センターでは毎年、環境安全研究センターシンポジウムを開催しております。このシンポジウムでは、環境と安全に関わる研究や事例を、各方面の研究者から紹介することを目的としています。

第21回目となる今年は、「資源・材料とサステイナビリティ」をテーマに、資源・材料の持続的利用や、エネルギー分野を長期的に支える材料、さらに昨今世界的に顕在化してきた水資源問題に焦点を当て、本学の５名の研究者が研究活動を紹介するとともに、それぞれの視点からサステイナビリティに対する展望を提示いたします。多くの方々のご参加をお待ちしております。

日時：12月14日（水）13：30～17：00
　　（13：00開場）
会場：東京大学弥生講堂・一条ホール

＜プログラム＞
第一部
13：30～13：40
開会の挨拶
尾張　真則　環境安全研究センター長　教授
13：40～14：10
特別講演「金属資源の“枯渇性”と実際」
前田　正史（理事・副学長　教授）
14：10～14：40
「リサイクルと都市鉱山」
醍醐　市朗（大学院工学系研究科　特任准教授）
14：40～15：10
「持続可能なバイオマス利活用の実現に向けた取り組み」
望月　和博（生産技術研究所　特任准教授）

第二部
15：30～16：00
「水システムの健全性」
村上　道夫（東京大学総括プロジェクト機構
「水の知」（サントリー）総括寄付講座　特任講師）
16：00～16：30
「太陽電池材料の課題と発展」

吉川　健（環境安全研究センター　准教授）
16：30～17：00
「家庭における低炭素型エネルギー技術の可能性」
吉田　好邦（新領域創成科学研究科　准教授）
17：00　閉会

参加費：無料
参加申込み：メールにて、以下の宛先までお申込み下さい。当日参加も可能ですが、資料準備の都合上、事前申込みにご協力下さい。

問い合わせ・参加申込み先：
東京大学環境安全研究センター・シンポジウム係
E-mail：2011escsympo@esc.u-tokyo.ac.jp
TEL: 03-5841-2972

募集

募集

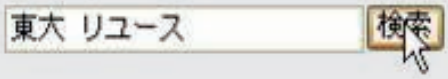
本部資産管理部資産課

募集開始!　リユースノートパソコン無償レンタル

今回で第７回を迎えるリユースノートパソコンの無償レンタル。本学の学生であればどなたでも応募できますので、皆様ふるってご応募ください。

事業目的：学内資産を活用して、学生への教育研究支援を行い、エコ･キャンパス化の取り組みの一つとして、無駄にノートパソコンを廃棄せず、キャンパスの中で再利用することで、学内に循環型社会を構築し、地球環境に貢献することを目指しています。

応募資格：本学の学生（学部学生・大学院生等）
応募期間：11月15日（火）～12月５日（月）
※　詳細は下記ホームページをご覧ください。
http://pcreuse.adm.u-tokyo.ac.jp/



本部資産管理部資産課では平成21年６月に「ノートＰＣリユースオフィス」を設置し、教職員の皆様よりご提供いただいたパソコンを学生に無償レンタルしています。今後とも、本事業へのご理解とご協力をよろしくお願いします。

【事業への問い合わせ等】
ノートＰＣリユースオフィス（本部資産管理部資産課内）
E-mail：pcreuse@adm.u-tokyo.ac.jp　内線：22135

お知らせ

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

駒場博物館「一高／獨逸　第一高等学校資料にみる日独交流史」展

駒場博物館では、10月15日（土）より１階展示室にて「一高／獨逸　第一高等学校資料にみる日独交流史」展を開催しています。

日独修好150周年を記念して開催される本展では、駒場博物館所蔵の第一高等学校資料をもとに、語学教育、科学技術、課外活動など、いままであまり知られることのなかった側面を中心に、日独交流の軌跡を辿ります。詳細はホームページをご覧ください。
（http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/exihibition.html）

会場　駒場博物館1階展示室
会期　10月15日（土）～12月４日（日）
開館時間　10：00～18：00（入室は17：30まで）
休館日　火曜日
入館料　無料
問合せ先　駒場博物館　03-5454-6139（内46139）
E-mail　komabamuseum@adm.c.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

東大駒場地区保育所創立40周年特別企画
駒場博物館「はだしの写真展 東大駒場地区保育所の子どもたち」

駒場博物館では、10月29日（土）より２階展示室にて「はだしの写真展　東大駒場地区保育所のこどもたち」展を開催しています。

東大駒場保育所創立40周年を記念した本展では、写真家の中川十内氏が撮影した在園児65人の足の裏の写真を展示いたします。０～７歳までのこどもたちの足の表情を一斉に展示することで、それぞれの個性豊かなこどもの「成長」を実感し、当保育所の理念を理解していただけることでしょう。

詳細はホームページをご覧ください。
（http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/exihibition.html）

会場　駒場博物館２階展示室
会期　10月29日（土）～12月２日（金）
開館時間　10：00～18：00（入室は17：30まで）
休館日　火曜日
入館料　無料
問合せ先　駒場博物館　03-5454-6139（内46139）
E-mail komabamuseum@adm.c.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第５４２（11月２日）号の発行
――教員による、学生のための学内新聞――

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、駒場保健センターで無料配布しています。バックナンバーもあります。

第542号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

小豆川勝見：放射性物質を測ってみると…
増田一夫：ジャン=ピエール・デュピュイ講演会
「悪意なき殺人者と憎悪なき被害者の住む楽園
――ヒロシマ、チェルノブイリ、フクシマ」
田中純　：秘密の小部屋――「トポフィリ
――夢想の空間」展をめぐって
岡本拓司：ヒットラー・ユーゲントのバカヤロー！
「一高／獨逸」展の開催の経緯と準備について

〈時に沿って〉
福岡安都子：
遠方より来たりて朋有り、亦た楽しからずや
伴野太祐：界面活性剤と私
石井志保子：新しい場所で
杉山清彦：二つの「災後」から
上野和紀：化学の島から物理の島へ
古荘真敬：はじまり、はじまり
金井雅彦：リーマン幾何、剛性、そして…

オルガン委員会：第８回室内楽演奏会
ピアノ委員会：第12回室内演奏会
学部報委員会：コーナーストーン

お知らせ

史料編纂所

奈良国立博物館・特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」への出陳・協力

史料編纂所は、奈良国立博物館の特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」（会期：2011年12月６日（火）～2012年１月15日（日）、主催：同館・春日大社・仏教美術協会）へ協力します。

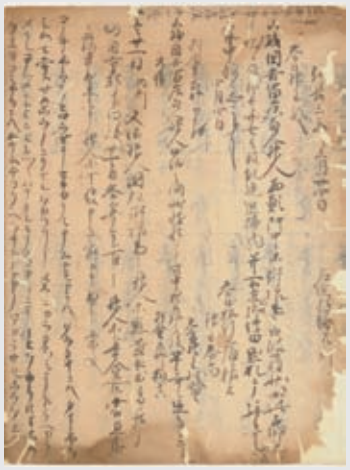
本展は、毎年12月17日を中心に営まれる「春日若宮おん祭」（国指定重要無形民俗文化財）にあわせて開催されるもので、年ごとに小テーマが設けられています。本年は、おん祭における様々な芸能のうちから、競馬と相撲をとりあげ、それと併せて、平安時代から明治維新期までの春日社の社家（神官を出す家系）ゆかりの作品・史料に焦点を当てています。

本所では、2010年度より文部科学省認定の共同利用・共同研究拠点「日本史史料の研究資源化に関する研究拠点」としての活動を開始し、五つの特定研究課題のひとつとして、「春日大社所蔵「大東文書」の調査・撮影」を進めてきました。本展では、その成果にもとづいて、従来あまり知られてこなかった中世の貴重な文献を紹介するとともに、関連する本所所蔵の原本史料を出陳します。

今年はおん祭の中心行事が金曜日深夜から土曜日深夜にあたり、暗闇のなかでのお旅所への遷幸、平安時代から江戸時代にわたる風流のお渡り行列、お旅所における神楽・田楽・舞楽・能など多様な芸能を間近に見るのによい機会となっております。お旅所と隣接する博物館で開催される本展にも足をお運びいただき、本所の研究活動の一端もご観覧下さい。

展覧会の概要は奈良国立博物館のホームページ、おん祭については春日大社のホームページにてご確認下さい。

奈良国立博物館
http://www.narahaku.go.jp/exhibition/special.html
春日大社
http://www.kasugataisha.or.jp/onmatsuri/
休館日：12月12・19・26日、１月１・３・10日
開館時間：９：30～17：00（入館は閉館の30分前まで）
12月17日（土）は19：00まで開館
観覧料金：一般500円・大学生250円・高校生以下無料
公開講座：「春日社旧社家の大東家文書と『皇年代記』」藤原重雄（本所助教）、１月７日（土）13：30～、奈良国立博物館講堂



史料編纂所所蔵『春日社旧記』のうち「弘長三年記」
（展示予定期間：2011年12月6日～25日）

お知らせ

情報基盤センター

駒場IIキャンパスでも開催！　“情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ

講習会に参加して、文献の探し方・Webでの文献管理方法を、マスターしましょう！

情報基盤センター図書館電子化部門では、定期的に、“情報探索ガイダンス”各種コースを実施しています。

12月は、文献検索初心者におすすめ「はじめての論文の探し方」や、大学院数理科学研究科図書室との共催による、数学分野学術文献データベース「MathSciNet」講習会などを開催します。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。
※学外からの利用方法はどのコースでも説明します。

■ 12/８（木）15:00～16:00 [会場:本郷]
【はじめての論文の探し方】　※予約不要
「文献検索は初めて」という初心者向けにゆっくりと、文献リストの読み取り方、図書、雑誌、日本語論文(CiNii)、英語論文(Web of Science)の基本的な探し方を実習します。

■ 12/９（金）16:30～17:30 [会場:数理研]
■ 12/15（木）15:00～16:00 [会場:数理研]
（同内容２回）
【数学分野の文献検索をマスター! MathSciNet講習会】
※予約優先
American Mathematical Society提供の数学分野学術文献データベース「MathSciNet」の使い方を実習します。雑誌・会議録・数学研究図書の書誌情報やレビュー等をカバー。外部から講師を招聘して開催します。同内容で２回実施しますので、ご都合のつくほうにお申込みください。
（共催：大学院数理科学研究科図書室）

■ 12/13（火）15:00～16:00 [会場: 本郷]
【はじめてのWeb of Science】　※予約不要
Web of Scienceは12,000誌以上の学術雑誌掲載論文を検索できる、代表的な雑誌論文データベースです。論文の引用情報も調べることができます。収録論文は全分野にわたるため、どの分野の方にもおすすめします。はじめての方向けにゆっくりと、Web of Scienceを使った英語論文の基本的な探し方を実習します。

■ 12/15（木）15:30～16:30 [会場:駒場II(生研)]
【はじめての論文の探し方 in 駒場II】　※予約優先
好評だった昨年度に引き続き、駒場IIキャンパスでの出張講習を実施します！ぜひこの機会にご参加ください。
大学院生・研究者・研究補助者など駒場IIキャンパスの方向けに、学内での論文入手方法と、代表的な文献データベース（CiNii、Web of Science）を使ってキーワード等から雑誌論文（日本語・英語）を探す基本的な方法を易しく解説します。
※講義形式です。検索実習はありません。
（共催：生産技術研究所図書室・先端科学技術研究センター図書室）

■ 12/16（金）15:00～16:00 [会場:本郷]
【新RefWorks2.0を使うには？】　※予約不要
これからRefWorksを使ってみようという方向けに、Web版の文献管理ツール「RefWorks」の使い方を説明します。
東京大学OPACや、CiNii（日本語論文）、Web of Science（英語論文）など代表的なデータベースからのデータの取り込み方と、参考文献リストの自動作成方法を実習します。
※10月末にバージョンアップした「RefWorks2.0」の講習です。旧バージョンからご利用の方は原則受講不要ですが、興味のある方はご参加ください。

■ 12/20（火）12:10〜12:30 [会場: 本郷]
【自宅から検索するには？】（20分ワンポイント講習）
※予約不要
自宅や帰省・出張先など、学外からデータベースや電子ジャーナルを使う方法だけ知りたい。そんな方にお奨めなのがこのコース。年度末に入る前に、学外からの利用法を確認しておきましょう。
ECCSアカウント認証によるSSL-VPN Gatewayサービスを紹介します。

●会場：
【本郷】総合図書館 1階 講習会コーナー　定員15名

【数理研】大学院数理科学研究科棟２階計算機室
定員20名

【駒場II(生研)】生産技術研究所 An棟４階
小セミナー室１（An403）　定員30名

●参加費：無料

●申込み先：（会場によって異なる）
【本郷】　予約不要です。
【数理研】
大学院数理科学研究科図書室
（library* ms.u-tokyo.ac.jp）
【生研】
生産技術研究所図書室（tosho* iis.u-tokyo.ac.jp）

各申込み先（*は@に置き換えて送信してください）に、以下のメールをお送りください。
メールのタイトル：12月ガイダンス参加希望（参加日・会場）
本文：
(1)参加日・会場 (2)氏名 (3)身分 (4)所属 (5)講師への質問 (6)利用経験

★授業・ゼミ・学生グループなど対象にオーダーメイドで講習します！
論文の探し方の出張講習・オーダーメイド講習を随時受付中です（無料）。授業やゼミの内容に合わせて講習いたします。会場のことなど、ご相談に応じます。まずはお気軽にお問い合わせください。どのキャンパスでも、学生だけのグループでもOKです。
過去の実施例は以下のURLでご覧いただけます。
（http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html）

★Litetopiメールマガジン発信中！
本学所属の方を対象に、データベースのニュースや講習会のご案内などをお届けします。配信ご希望の方は、下記アドレスまでメールでご連絡ください。（無料）

literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

●お問い合わせ：
学術情報リテラシー係 03-5841-2649（内線：22649）
literacy * lib.u-tokyo.ac.jp
（*は@に置き換えて送信してください。）
http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html
（ツイッター　http://twitter.com/gacos_todai）

お知らせ

情報基盤センター

教育用計算機システム(ECCS)のユーザIDが変わります！
― 学生ユーザのユーザIDの共通ID化について ―

2012年３月１日（木）より、ECCSを利用する学生ユーザのユーザID（ユーザ名）を共通ID（下10桁）に変更します。端末・メールシステム・無線LAN・CFIVEなど、ECCSに関わるシステムの利用には、ユーザIDとして共通ID を入力することになります。現行の学生証番号に基づくユーザIDによるメールアドレス宛のメールは、2012年９月頃まで受信できるように設定します。なお、教職員のユーザIDは従来のままで変更しません。

●今後の日程
以下は今後の日程の概要です。ただし、2012年３月稼働開始の次期教育用計算機システム（ECCS2012）の導入状況によって、変更する可能性があります。

2012年２月下旬:
端末などの利用を一時停止します。
・パスワード設定画面も一時的に停止します。
・メールシステムは、現行のユーザIDで２月末まで引き続き利用可能です。

2012年３月１日:
学生ユーザのユーザIDを共通IDに変更します。
・ユーザID として共通IDを入力してください。
・パスワードは変更しません。従って、情報基盤センタ

ーの窓口にお越し頂く必要はありません。
・メールクライアントやWebブラウザなどに、現行のユーザIDを記憶させていた場合は、各自で変更が必要です。

なお、問い合わせ先情報等、詳しくは、以下のWebページをご覧ください。
http://www.ecc.u-tokyo.ac.jp/announcement/2011/10/11_1498.html
「学生ユーザのユーザIDの共通ID化について」

ニュースページ、インフォメーションページへの記事提出要領

「学内広報」は皆さんから送っていただく記事で作られています。下記の提出要領により、積極的に学内の情報をお寄せください。

1．提出方法
記事は、各部局の広報担当者を通して、メールの添付ファイルとしてデータで送付すること。

2．締切日
本学ＨＰの左下にある「学内広報アイコン」をクリックして発行スケジュールをご確認ください。

3．提出の際の留意事項

（1）文字数
文字数は記事１件につき800字を目安とし、内容により増減は可とする。

（2）写真
① 写真を掲載する場合はキャプション（説明文）を25文字以内で添えること。
② 写真を電子データで提出する場合、Wordファイルなどに貼り付けず、jpeg等の形式による元の画像ファイルを送付すること。
③ 写真は電子データがない場合、プリントのものも掲載可とする。

（3）書式
① 原稿は１行25文字の書式で作成すること（ただし、大きな図表などが含まれる場合は、この限りではない）。
② 原稿のはじめに担当部局名と記事タイトルを記載すること。
③ 記事タイトルは極力簡潔でわかりやすいものとすること。

（4）文章表現のきまり
① 句読点は「、」「。」を用いること（「，」「．」は用いない）。
② 時間は24時間表記とし、日付には括弧書きで曜日をつけること。
③ 記事内の人名は極力フルネームで表記。
④ この他、特に表記する必要のない「平成●年」は削除する、特に支障がない限り「東京大学」は「本学」とする等、表記統一のための修正を編集段階で行う。

※編集スケジュールの都合上、原則として校正はできません。基本的にはいただいた原稿がそのまま掲載されますので、内容に間違いのないよう、十分ご注意ください。

4．問い合わせ先・提出先
本部広報課　広報企画チーム
TEL：03-3811-3393　内線22031
E―mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

事務連絡

人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

発令日	氏名	異動内容	旧（現）職等
（退　職）			
23.10.9	秋元　博路	辞　職	大学院工学系研究科准教授
23.10.31	辻　哲夫	辞　職（高齢社会総合研究機構特任教授）	高齢社会総合研究機構教授
23.10.31	福田　敬	辞　職（国立保健医療科学院研究所情報支援研究センター上席主任研究官）	大学院医学系研究科准教授
23.10.31	芹澤　武	辞　職（東京工業大学大学院理工学研究科教授）	先端科学技術研究センター准教授
（採　用）			
23.10.16	山下　淳	大学院工学系研究科准教授	静岡大学工学部准教授
23.10.16	鈴木　邦律	大学院新領域創成科学研究科附属バイオイメージングセンター准教授	東京工業大学フロンティア研究機構先進研究教員
23.10.16	野田　岳志	医科学研究所准教授	医科学研究所附属感染症国際研究センター特任助教
（昇　任）			
23.10.16	森　肇志	大学院法学政治学研究科教授	大学院法学政治学研究科准教授
23.10.16	大須賀　穣	大学院医学系研究科准教授	医学部講師
23.10.16	豊田　太郎	大学院総合文化研究科准教授	大学院総合文化研究科講師
23.10.16	小林　徹也	生産技術研究所准教授	生産技術研究所講師
23.10.16	佐藤　正樹	大気海洋研究所附属地球表層圏変動研究センター教授	大気海洋研究所准教授
23.11.1	飯島　勝矢	高齢社会総合研究機構准教授	大学院医学系研究科講師
23.11.1	花岡　健二郎	大学院薬学系研究科准教授	大学院薬学系研究科講師
23.11.1	川口　寧	医科学研究所教授	医科学研究所附属感染症国際研究センター准教授

※ 退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。
東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

Contents

特集

02 第10回東京大学ホームカミングデイ開催！
10 平成23年度第１回学生表彰「東京大学総長賞」授与式開催
12 東京大学基金 大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センター活動支援プロジェクト始まる

NEWS

一般ニュース

14 高齢社会総合研究機構
スウェーデン－日本 高齢社会シンポジウム開催される
15 産学連携本部
東大発バイオベンチャー ペプチドリーム㈱が日本学術会議会長賞を受賞 ―第９回産学官連携功労者表彰―
16 本部奨学厚生課
東京大学東日本大震災被災者特別援助・さつき会奨学金受給者証書授与式を開催
16 産学連携本部
東京大学産学連携協議会「平成23年度第1回東京大学産学連携協議会アドバイザリーボードミーティング」開催
17 高齢社会総合研究機構
柏の在宅医療研修　盛況のうちに終了
18 本部社会連携推進課
平成23年度「東京大学稷門賞」授賞式が挙行される
19 産学連携本部
「電力エネルギーにおける技術革新」―第21回科学技術交流フォーラム開催―
20 本部奨学厚生課
豊島国際学生宿舎で消防訓練と「寮祭」を実施
21 海洋アライアンス
子供たちに海の研究の最前線を伝える出前授業を開催
22 バリアフリー支援室
「平成23年度バリアフリー支援実施担当者研修会」開催される
22 本部キャリアサポート課
知の創造的摩擦プロジェクト第13回交流会開催
23 本部学生支援課
第35回東京大学伊豆・戸田マラソン大会が開催される

部局ニュース

25 大学院総合文化研究科・教養学部
21 Komaba Center for Educational Excellence (21KOMCEE)竣工披露記念式典開催
26 史料編纂所
セミナー「王朝の「雅」を伝える公家文庫」開催
26 大学院新領域創成科学研究科
第６回新領域創成科学研究科「市民講座」開催「地球温暖化問題と原発環境汚染問題」
27 大学院教育学研究科・教育学部
教育学部附属中等教育学校軟式野球部　東京都高等学校軟式野球秋季大会優勝
28 大学院新領域創成科学研究科
第７回新領域創成科学研究科「市民講座」開催「太陽光発電は原子力発電を超えるか？」
29 大学院教育学研究科・教育学部
国際シンポジウム「震災被害への有効な心理支援に向けて―今、臨床心理学はどのような社会貢献ができるのか―」の開催
29 医科学研究所
国際学生フォーラム2011主催
30 大学院農学生命科学研究科・農学部
西東京フィールド 防災訓練を実施
31 大学院教育学研究科・教育学部
留学生修学旅行で日本の秋を満喫
32 大学院情報学環・学際情報学府
現代韓国研究センター駒場支所の開設
32 医科学研究所
医科学研究所慰霊祭を挙行
33 低温センター
平成23年度浅野地区合同防災訓練の実施
33 大学院人文社会系研究科・文学部
第１回東京大学文学部公開講座を開催
34 史料編纂所
倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会を開催
35 大学院教育学研究科・教育学部
図書館団地総合防災訓練実施される
36 先端科学技術研究センター
「DO-IT Japan」が博報賞を受賞！
37 東洋文化研究所
第11回東京大学東洋文化研究所公開講座が開催される

コラム

38 決算のDOOR　～数字が語る東京大学　第14回
38 インタープリターズバイブル　vol.52
39 Crossroad　産学連携本部だより　vol.72
40 Policy + alt　vol.26
41 ASIAN DIVERSITY　No.13
41 Relay Column「ワタシのオシゴト」　第69回
42 コミュニケーションセンターだより　No.82
42 救援・復興支援室より　No.6

INFORMATION

シンポジウム・講演会

43 生産技術研究所
HPCI戦略プログラム分野４：次世代ものづくり第２回シンポジウム開催
43 環境安全研究センター
第21回環境安全研究センターシンポジウム「資源・材料とサステイナビリティ」

募集

44 本部資産管理部資産課
募集開始！　リユースノートパソコン無償レンタル

お知らせ

44 大学院総合文化研究科・教養学部
駒場博物館「一高／獨逸　第一高等学校資料にみる日独交流史」展
45 大学院総合文化研究科・教養学部
東大駒場地区保育所創立40周年特別企画　駒場博物館「はだしの写真展 東大駒場地区保育所の子どもたち」
45 大学院総合文化研究科・教養学部
「教養学部報」第５４２（11月２日）号の発行 ――教員による、学生のための学内新聞――
46 史料編纂所
奈良国立博物館・特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」への出陳・協力
46 情報基盤センター
駒場IIキャンパスでも開催！　“情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ
48 情報基盤センター
教育用計算機システム(ECCS)のユーザIDが変わります！― 学生ユーザのユーザIDの共通ID化について ―

事務連絡

50 人事異動（教員）

淡青評論

52 IARUサマープログラム

編集後記

２号続けて宣伝になって恐縮ですが、今回は東大 HP トップ（本部HP）のコンテンツ、「東大リサーチ（Todai Research）」のお話を……。東京大学の学問の「蓄積」と「最先端」を紹介するこのコーナーは、いわば、誰でも馴染める「学問のショーウィンドウ」。分かりやすい読み物の形式で多彩な「東大の学問」をご堪能いただけます。学内広報では近々に（半年以内かな?）、この「東大リサーチ」に関する特集を組む予定ですので、みなさま、乞う、ご期待!（し）

◆表紙写真◆
ホームカミングデイには家族連れもたくさん訪れた
【02～09ページに関連記事】

淡青評論

七徳堂鬼瓦

IARUサマープログラム

東京大学は、世界の10大学連合であるInternational Alliance of Research Universities（IARU）に加盟している。そして、英語で提供されるサマープログラムを各大学が実施し、学生を派遣し合っている。東京大学では、このIARU Global Summer Programのもとで、Sustainable Urban Management, Nanoscience, Introduction to the Japanese Language, Japan in Today's World（JTW）の４コースを実施している。

JTWのコーディネーターを２年間担当した者として最も残念なのは、本学学生の参加が極めて少ないことである。ただ、これには無理もないところもある。JTWは教養学部の通常授業が終了した７月最後の２週間に設定しているが、まだ試験やレポート提出も残っている。工学部のプログラムでは学期中に実施せざるをえなく、そこにも東大の学生の姿はほとんど見られない。

私がこのプログラムを担当し続けているのは、東京大学における授業が多様なバックグラウンドを持つ学生によって担われるべきだと考えるからである。私は大学院で「人間の安全保障プログラム」を担当している。このプログラムに所属する大学院生の特徴は、数多くの外国人、社会人、女性の数が多いことである。さまざまな経験をもつ学生が同じ教室で議論を交わすことによって授業は活性化し、私も授業のやり方や内容を考えなければならない。

そして、IARU Global Summer Programも東京大学における学生の多様化と授業の活性化の一貫であると考える。学部学生もサマープログラムなどをとおして海外における教育を受け、東大での教育を相対化する力をつけてほしい。東京大学を多様化することそれは、東京大学を限られた層の人々の特権的な場にしない努力の一つである。

プログラムへ東大の学生の参加が少ないのは、授業期間の違いなどの制度上の違いが根本原因であるが、それをただ嘆いても仕方がない。予算も人員も削減されている中、余計なことに手を出す余裕などないという声もあるだろうが、東京大学の学生と教育の多様化に向け、広報の不足や準備の遅れなどを反省し、JTWの改善につとめたい。

木村　秀雄（大学院総合文化研究科・教養学部）

（淡青評論は、学内の教職員の方々にお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報課を通じて行ってください。

No.1418　　2011年11月24日
東京大学広報室
〒113-8654
東京都文京区本郷７丁目３番１号
東京大学本部広報課
TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
http://www.u-tokyo.ac.jp/